

片山潜，在米日本人社会主義団と 初期コミンテルン

山内 昭人

はじめに

- 1 コミンテルン・アムステルダム・サブビューローと日本社会主義者
- 2 コミンテルン・パンアメリカン・エイジェンシー議長としての片山
- 3 在米日本人社会主義団（1）
- 4 在米日本人社会主義団（2）
- 5 片山潜のモスクワ行とパンアメリカン・エイジェンシーの解散
- 6 片山による理論的準備

はじめに

日本国内での運動の困難な状況下で、初期コミンテルンとその下部組織の側からの日本社会主義運動との接触、さらには日本共産党創設などの試みは、モスクワを起点に言わば「西回り」と「東回り」で模索された。すなわち、前者はアムステルダム - アメリカ - メキシコのルートであり、それは片山潜とS.J. リュトヘルスとの1916年以来の盟友関係がきっかけとなって開拓されたと言っても過言でない。後者はモスクワ - シベリア - 上海を主としたルートであり、こちらで最初に活躍する日本人もまた在米のちに在墨片山との密接な連携の下に派遣された在米日本人社会主義団のメンバーであった。

本稿は、初期日本共産主義運動を国際社会主義というインタナショナル史の文脈で捉えようとする試みであり、最初に上記「西回り」のルートによる運動の解明を試みる。「東回り」のルートについては続稿で試みる予定である。

「西回り」の運動に関連して既に私は、二度史料紹介を行っている（山内昭人「日本社会主義者とコミンテルン・アムステルダム・サブビューローとの通信，1919-1920年」『大原社会問題研究所雑誌』499号，2000年6月，48-63；同「在墨片山潜の書簡と草稿類，1921年」同上，506号，2001年1月，31-69。以下、注の煩雑を避けるため、山内（2000）、山内（2001）とそれぞれ略記して本文に付す。他の文献も同様）。その後、2002年9月にモスクワを再訪し、前回調査できなかった分も含め1,000枚近い史料を再び集めることができた。そこで、前二回に追加の史料紹介を行うことによってでは全体の史料が包括的に整理できず、煩雑さを免れないことを考慮して、今回は関連史料

を一括して再整理し、それに依拠した上で「西回り」の運動全体の解明を試みることにする。

それに先だって、史料および文献について触れておく。

初期コミンテルンと日本共産党およびその前史に関する史料は、定評のある村田陽一編訳『資料集 コミンテルンと日本』第1巻（大月書店，1986）に続いて、荻野富士夫が精力的に集め、編集した『特高警察関係資料集成』第1，6巻（不二出版，1991）の中に数点見いだせる。また，近年目録が整備され利用しやすくなった外務省外交史料館の，とりわけ「過激派其他危険主義者取締関係雑件 本邦人之部」(4.3.2.1-1)の中に関連史料を散発的に見いだせる。しかし，なんとと言ってもモスクワのコミンテルン文庫の公開の意義は決定的に大きく，本稿は同文庫が納まっているロシア国立社会-政治史アルヒーフ（

[]; 以下，ルガスピと略記）の史料を全面的に活用したものである。

核となる史料は，フォント495，オーピシ108（メキシコ共産党）とフォント495，オーピシ127（日本共産党），さらにフォント521（片山潜文庫）のものである。そのうち日本共産党ファイルについては，いち早く加藤哲郎によって（史料の網羅性という観点からは不備を残しているものの）重要史料の公表もしくは紹介が継続中である（例えば，加藤哲郎「1922年9月の日本共産党綱領（上）」『大原社会問題研究所雑誌』481号，1998年12月，43-60；同「第一次共産党のモスクワ報告書（上）」同上，489号，1999年8月，35-56）。日本共産党関係史料の本格的な調査は，和田春樹を中心としたグループによって進められ，その途中の科学研究費報告を経て，露語による史料集が刊行され，目下新たな史料を増補した日本語版が準備されつつある（和田春樹「コミンテルンと日本共産党」『ソ連共産党，コミンテルンと日本，朝鮮』（平成10年～平成11年度 科学研究費補助金基盤研究(B)(2) 研究成果報告書，研究代表者 石井規衛，2000年3月），1-26；（ ）， . 1917-1941 .（ ，2001）；参照，富田武「コミンテルンと日本共産党 旧ソ連アルヒーフ資料から 」『歴史評論』627号，2002年7月，30-44）。しかし，いずれの公刊史料においても，既に私が史料公開し，本稿で明らかにしようとする「西回り」の運動については，ほとんど取り上げられていない。

なお，稲葉千晴・D.B. パヴロフ編集による『ロシア共産党文書館日本関連文書目録（1904-1954年）』（ナウカ，2001）は，網羅的で貴重な目録だが，本目録かもしくはマイクロフィルム（55リール）で公刊された総目録（ただしコミンテルン文庫など重要目録が未収録）を手がかりにして実際に史料にあたらなければ，どの史料が重要ななど個別にはわからない。

1 コミンテルン・アムステルダム・サブビューローと日本社会主義者

（1）リュトヘルスと杉山正三

日本社会主義運動がコミンテルンとつながった最初のきっかけは，リュトヘルスと片山潜との交流と言える（参照，山内昭人『リュトヘルスとインタナショナル史研究 片山潜・ポリシェヴィキ・アメリカレフトウィング 』（ミネルヴァ書房，1996））。1918年4月末に離米し，日本に3カ月滞在した後，シベリアを横断し，モスクワに到着したリュトヘルスが，1919年3月のコミンテ

ルン創立大会で日本社会主義者による1918年の決議書簡「ロシアの同志へ」および1917年のメイ・デー決議を代読した。

先の日本滞在中に片山の紹介状によってリュトヘルスが横浜で知り合った杉山正三が、2年後もリュトヘルスと文通していた。1919年6月4日、杉山はリュトヘルスへ、「あなたが当地を離れて以来、日本における社会主義に関する傾向は大いに变化した。……今や労働運動は徐々に増しつつある」こと、そしてリュトヘルスから一度得た手紙〔未詳〕を「東京の同志たちに回した」ことを伝えた（山内（2000），59；ルガスビ史料は既発表分については史料番号を割愛し、初出のは

， .497, .2, .2, .15-18のように記すべきところだが、以下497/2/2/15-18と略記する）。

それを皮切りに、杉山がリュトヘルスに伝えた内容を整理すると、以下のようになる（括弧内の数字は前回公表時の史料整理番号。以下、同様）。

- 1) 日本労働運動の昂揚（ - , ）
- 2) 大杉栄論文「労働運動の転機」を訳出し、同封したこと（ - , a）
- 3) アムステルダム・サブビューローの機関紙『ブレティン』の受領報告（ - ）
- 4) スネーフリーの（実現しなかった）日本行計画に関して、杉山がスネーフリートへ手紙を送ったとの言及（ - ）

そしてリュトヘルスの方から杉山のもとへ届いた1920年5月27日付長文書簡（ - ）は、その内容において注目される。すなわち、アムステルダム・サブビューローが一方向的にコミンテルン本部から解散指令を受けた直後であったからでもあろう、西洋の当面の運動への失望から、東洋の運動への期待が表明され、世界革命のために極東、とりわけ日本と中国での発展がきわめて重要とみなされた（後述）。それは計6パラグラフが省略され、宛名を伏せて、アメリカ共産党機関誌『コミュニスト』に公表されたのだが、その掲載は同書簡が在米片山経由で届けられたからである（山内（2000），60-61）。

この杉山とリュトヘルスの文通によって、従来の研究が杉山の果たした役割を見落としていたことが明らかとなった。リュトヘルスが滞日中から離日後も日本国内の社会主義者との接触については、大杉に近い杉山、吉田只次らと実質的に密であり、堺利彦、山川均らとは上記決議書簡およびメイ・デー決議のリュトヘルスへの委託を除けば、むしろ疎遠に近かったことが判明した。あえて推測すれば、政治・思想的立場の違いが堺、山川らをして杉山経由の情報等へ消極的姿勢をとらせたのか、あるいは杉山がその情報伝達に本気で取り組まなかったのか、文面からだけだと前者のように思える。日本社会主義者の本陣は、コミンテルン・アムステルダム・サブビューローとの接触を試みうる状況にあったにもかかわらず、最後まで接触をもたずに終わった（なお、この時期日本社会主義者は国際社会主義運動の局外にあった、と従来解釈されてきたけれども、文献を通じての情報はかなり入ってきていたのであり、文献史的アプローチによるアメリカとの比較によって、堺、高島素之、山川によるポリシェヴィキ文献の「摂取」の差が確かめられる。例えば、日本社会主義者は、第2インタナショナルと連帯するのか、それとも来る新インタナショナルとか、の二者択一を迫る実践的要請を伴う理論には未だ達しなかった。山内昭人「片山潜の盟友リュトヘルスとインタナショナル（ ）」、『宮崎大学教育学部紀要』（社会科学），79号，1995年7月，22-28；同「ポリシェヴィキ文献と初期社会主義 堺・高島・山川」、『初期社会主義研究』10号，1997年9月，

101-115）。

（2）リュトヘルスと片山潜

1919年9月28日のコミンテルン執行委員会（ ）ビューロー決定にもとづき、リュトヘルスはレーニンから西欧におけるコミンテルン支部の設立を委任された。11月5日、リュトヘルスはオランダのアメルスフォルト到着後、直ちにそのアムステルダム・サブビューローの設立をめざしてロラント・ホルスト、ウェインコープ、パネクークらとともに活動を開始した。

1920年2月3-8日に 附属アムステルダム・サブビューローの指揮のもとアムステルダムで開かれた国際会議において、フレイナによって提案され、採択された決議の中に掲げられたアメリカン・サブビューローの職務の一つに、「5. 日本および極東における活動、そしてそれらとの連絡のために、一日本人同志の協力を確保する」ことがあった。「一日本人同志」とは明らかに片山潜をさしており、そのことは、同会議にイギリスから出席したマーフィが本国同志へ宛てた2月15日付書簡における以下の記述で確認される。「極東におけるそのような[各地のビューローのような]一組織の発展を企てるために、片山に対して手はずが整えられるべきである」(山内(2000), 50)。

その片山がニューヨークからアムステルダム・サブビューロー時代のリュトヘルスのもとへ送った1919年12月22日付書簡を皮切りに、片山がリュトヘルスに伝えた内容も整理しておく、以下のようになる。

- 1) アメリカ共産主義の活動状況、とりわけ1920年1月2日のいわゆるパーマー・レイド以降、自らも地下潜行を余儀なくされたほどの厳しさ(- ,)
- 2) アメリカ社会党全国執行委員会および理論的指導者M. ヒルキット批判(-)
- 3) 日本の1918年8月の米騒動以来、労働者のストライキやサボタージュが頻発するほどの労働運動の昂揚と、社会主義思想、とりわけボリシェヴィズムの普及(- , ,)
全般にわたって、特に最後の普及については、「ボリシェヴィズムは日本において今や全くポピュラーである」と楽観的すぎた。
- 4) 日本軍によるシベリア出兵(具体的にはウラジヴォストーク占領)への抗議(- , a , , a)
- 5) 片山らに在米日本人社会主義団の活動(- , 参照 a)
- 6) リュトヘルスからの書簡への肯定的論評、すなわち - (前節)への論評(-)と1920年5月21日書簡[未詳]への論評(-)
- 7) フレイナ・スパイ嫌疑事件(-) フレイナと片山、そしてリュトヘルスの三者の交流は密で、互いの信頼感はゆるがぬものであった。

それらのうち、1920年2月24日付第2書簡を抜粋すると、「私の友人でありF. [フレイナ]氏も私が名前を告げたので知っている石本[恵吉]が、ストックホルムから私に二度書いてきた。当地で彼はS. [恐らくスウェーデン社会主義左派F. ストレム]と会い、今フィンランドのヘルシンキにいと信ずる。彼が言うには、そこからレヴァルに戻り、それから_____ [ロシア]へ行くつもりだ。私は彼にT. K. B. [トロツキー、コロantai、プハーリンカ]への紹介状を与えた」(山内

(2000), 51-52)。

男爵石本が1919年春以来ゲイル、マルテンスを經由して片山と知り合うことになった経過説明は割愛するとして(参照、山内(2000), 52-53; 付記しておけば、石本はメアリィ・マーシ宅を片山の友人として訪問し、そのことは直後の1919年8月26日にマーシによってR夫人[バルタ・リュトヘルス]へ伝えられた[497/2/2/229-230])、同年秋、石本はニューヨークからロシア行の計画を手紙でゲイルへ知らせた。そこでゲイルらは、第3インタナショナルへ自分たちの党(同年9月7日に暫定的に組織されたメキシコ共産党)を代表して国際書記を派遣するには資金がなかったので、石本に信任状を与えた。1920年1月3日、石本はニュージャージー州ニューワーク港を片山、田口運蔵、アグネス・スメドレーに見送られて出帆した。「ノルウェーのクリスティアニアで投函され、[ゲイルが]受け取ったばかりの彼からの1月9日付書簡によれば、彼は二、三日中にはロシアにいて、計画されたような第3インタナショナルの諸会議に出席するだろう、と」(山内(2000), 53; 参照、駐英珍田捨巳大使の内田康哉外務大臣宛1920年2月27日発暗号電信、外務省外交史料館、4.3.2.1-1(12))。しかし、石本はロシアに入国できなかった。

1920年4月18日付第3書簡で、片山はリュトヘルスの「ビューロー」へ宛て、「アメリカにいる我々共産主義者は日本軍によるウラジヴォストーク占領を恥じており、それで我々はそれへの反対抗議を送った」ことを伝えた。その4月10日付の抗議声明は、早速オランダ共産党日刊紙『トリビューネ』5月28日号に掲載され、以後、各国機関紙類への転載が続くのだが、それを起草したのは在米日本人社会主義団であり(山内(2000), 53-55)、それについては第3章で扱う。

6月23日付第6書簡の中で片山は、リュトヘルスが5月27日付杉山宛書簡()で述べた「極東における見通しについて」賛成を表明した。「ボリシェヴィキ革命とその成功した仕事を語ることは、社会主義的宣伝の最良の方法だと考えるので、それで日本から当地にやって来、ここから戻っていく日本人の中へのボリシェヴィキ的プロパガンダを行うために私は非常に激しく働いてきた」とも記されたが、その方面の片山の活動が本稿後半で解明される。

2 コミンテルン・パンアメリカン・エイジェンシー議長としての片山

1920年9月29日の小ビューロー会議において、片山、フレイナ、ヤンソンから成るアメリカン(=パンアメリカン)・エイジェンシーの創設が決議された。続く10月12日の小ビューロー会議で、その任務が以下のように設定された。文献の普及、アメリカ大陸諸国の共産党およびグループの創設の援助、コミンテルンに加盟した党への財政的援助、そしてコミンテルンのロンドン出版部と接触して『共産主義インタナショナル』スペイン語版の刊行。ただし は、(同年5月初めにアムステルダム・サブビューローを解散したように)8月6日の「もっぱら技術的な目的のために単独で行う個人的なエイジェントだけを許す」とのロシア共産党(ボ)中央委員会政治局の決議を受けて、二日後に「執行委員会と並んで政治的任務をもった他のいかなるビューローも存在しないように要求する」ことになり、国内外の補助ビューローはひとまず姿を消した。パンアメリカン・エイジェンシーもそのような「個人的なエイジェント」として位置づけられたのであり、そのことはまた、 の一存で容易に解散させられる性格の機関であったことを意味する(山内

（2001），32-33）。

パンアメリカン・エイジェンシーは、スコット（ヤンソン；彼はこの時期本名を名乗ることはなく、本稿では原則として使用された偽名のままとする）がロシアから片山への信任状を携えてニューヨークへ戻ってきた1921年1月8日に活動を開始した。2月15日にフレイナも戻ってきて、初めてメンバーが揃い、正式に計画をまとめた。けれども、同エイジェンシーは当初から様々な問題を抱え、そのことは稿を改めて論じる必要があり、本稿ではその解散をめぐる問題に限り第5章で扱う（参照、山内（2001），64-68；495/108/11/5-10）。

ともかく、同エイジェンシー議長として片山は、1921年3月18日にニューヨークを発ち、23日にニューオーリンズから乗船し、30日ベラクルスに上陸し、翌31日メキシコ・シティに到着した（山内（2001），32）。ニューオーリンズから乗船する前夜3月22日、片山は当地からR[リュトヘルス]へしばらくぶりと思える書簡を送った。「これまで私はむしろ仕事関係についてあなたに書くことを怠っていた、それがあなたに正確な形で届かないであろうとのばかげた恐れのためである。近い将来、しかしながら、私はこれまでよりより自由にあなたに書くだらう」（495/108/11/4）。到着後まもなく4月12日に片山は、バルタ気付でRへ長文書簡を送った。「私は今H. Kiyoda[清田]の名で装っている」ことを知らせた片山は、「メキシコの場合をあなたに語る前に、検閲のため合州国ではそうすることができなかった私の体験を多かれ少なかれ十分に語りたい」と、1919年3月から2年間の捜査官による尋問や地下潜行などを時間を追って詳しく記し、続いて、エイジェンシーの創設からそのメキシコでの6週間の活動を包括的に報告した（495/108/11/5-10, 495/18/65/100-105）。

この後、片山のリュトヘルス宛書簡は、1921年4月28日の3番目、5月6日の4番目、そして7月5日の5番目と続く（495/108/11/22-23, 495/108/11/24, 495/108/11/26-28）。4番目の短信では、重要論文の送付について記されているだけだが（第6章参照）、他の二つでは、エイジェンシーのトラブルや活動内容が報告されていた。また5番目の追伸では、訪露した田口の紹介と彼への協力依頼がなされた（第3章第1節）。一方、リュトヘルスからの書簡は、3番目の片山書簡によれば、4月1日付のが届いたばかりで、それ以前に二つアトランティック・シティへ送られたと聞かされたが受け取っていないとのことであった。

パンアメリカン・エイジェンシー議長時代の片山のリュトヘルス宛書簡には、両者の変わらぬ親交の証があるだけでなく、以下で言及するコミンテルン本部への正式な活動報告に匹敵しうるほどの内容が込められていた。

ここで、ひとまず既発表の片山潜がメキシコ滞在中（1921年3月31日～10月28日）に書いた11の書簡および15の草稿類について、整理しておく。

同書簡については、以下ようになる（括弧内の数字は前回公表時の史料整理番号）。

- 1) エイジェンシー関係者たちへの書簡（ - , , , ）
- 2) コミンテルン執行委員会への報告（ - , , ）
- 3) 「同志」（内容から推定してフレイナの元内妻ジャネット・パール）への書簡（ - ）
- 4) 在米日本人社会主義団メンバーへの書簡（ - , , ） これら3書簡から判明したことは、合州国を離れた片山が依然同団の中心人物であったことである。

同じく草稿類については、以下ようになる。

- 1) メキシコ労働者および彼らの諸組織への声明(- , , ,)とメキシコ労働運動への論評等(- , , , ,) 前者はパンアメリカン・エイジェンシー議長の肩書で書かれたものであり、後者ではプロフィンテルンの臨時メキシコ・ビューロー機関誌『労働者』創刊が伝えられ、メキシコ共産党組織化の必要性が強調され、そして鉄道労働者の運動や一般労働組合員への支持が表明された。
- 2) マルクス主義理論についての解説(- ,)およびソヴェト・ロシアの現状についての解説(- ,)
- 3) 合州国に関する批評で、M. ヒルキット著『マルクスからレーニンへ』批判(-)とカリフォルニア州ターラックでの日本人労働者へのIWWメンバーの暴行事件について(-) 前者は在米日本人社会主義団の律[石垣栄太郎]のもとへ送付されたが、後者も恐らく同様であろう。

2度目の調査により加えられる書簡と報告類は、数量的には上に挙げたものを越えるのだが、スコットらエイジェンシー・メンバーとの通信は本稿では正面から扱わず、日本人同志たちとの通信は章を改めて取り上げていくので、ここではコミンテルン本部への報告のデータだけを上記のも加えてまとめておく(そのうち最後の3報告は第5章で扱う)

- 1) M. コベツキー宛 4月22日付(495/108/11/14-16, 521/1/17/2-4; 上記 -)
- 2) 第3インタナショナルの同志たち宛 4月25日付(495/108/11/20-21, 495/18/65/150-151)
- 3) 同志たち宛 5月26日付(495/108/11/25, 521/1/17/15; 上記 -)
- 4) 同志たち宛 5月26日および6月5日付(495/108/11/29-34)
- 5) 同志たち宛 6月11日付(495/18/66/14)
- 6) コミンテルン執行委員会宛 8月24日付(521/1/17/96-101; 上記 - ; なお、本報告の中で言及されている5月12日付報告は、不着かもしれないが、未発見)
- 7) 片山とフレイナの執行委員会小ビューロー宛 9月5日付(495/108/11/36-41, 495/18/66/98-103)
- 8) G. ジノヴィエフ宛 9月24日付(495/18/66/122-124)
- 9) 片山とフレイナのコミンテルン小ビューロー宛 9月28日付(495/108/11/42-46)
- 10) 片山とフレイナのコミンテルン小ビューロー宛 10月10日付(下書きは10月4日付)(495/108/11/47-50, 495/18/66/156-159, 495/18/66/237-240)

付記すれば、在墨前エイジェンシー議長としての活動開始早々、1921年1月15日付コミンテルン執行委員会書記M. コベツキー宛報告もある(495/108/11/1-3)。

3 在米日本人社会主義団(1)

(1) 国外派遣

吉原[源]太郎は既に1919年4月5日、ロシア革命勃発以来「渡欧の念禁ずる能はず常にそが機会を伺ひ」、「石油船に海員として乗込み」離米した(吉原タロ「英国より」『平民』22号、1919年7月)。この吉原に対して、片山は次のように激励した。「金石の意志と身体とを持ち燃ゆ[る]か

如き革命運動に対する熱心を抱く太郎氏は万難を排して渡欧した，無一文の彼の勇気彼の健闘の跡は全米至る処の警察に連載してある〔吉原は1917年9月28日のIWW本部強制捜索および1918年9月4日のシカゴ郵便局爆破容疑で二度逮捕・拘留されるが，いずれも証拠不十分で放免された〕吾人は其健在して益々奮闘せんことを渴望して止まず」（「巴里通信」『平民』21号，1919年6月）。

吉原について1919年5月に近藤栄蔵が日本へ派遣された（本章第5節）後，しばらく間を置いて1921年5月2日に田口運蔵が「米国貨物船二密乗シ」でロシアへ向けて離米した（Cf. 495/127/26/1-39; 平塚広義長崎県知事の水野錬太郎内務大臣，内田外務大臣ほか宛1922年11月4日付機密文書，4.3.2.1-1(14); 荻野編，6巻，135）。

出発を控えた田口のもとへ片山は，1921年4月20日にメキシコ・シティからレーニンへの紹介状を書き送った。「我々日本人の中で最も有望な同志である」田口を「私はあなたのもとへ送り出しつつあり，運蔵が日本と極東における来る社会革命にヨリ有効に仕えるよう，あなたに彼を教育し，鼓舞することを頼む」と（5/3/789/1）。派遣目的としてコミンテルン第3回大会出席だけが従来強調されてきたが，下線部のように派遣はヨリ遠大な計画のもとで練られていた（後述）。翌4月21日に準備されたもう一つの宛紹介状も同封されたであろう。白い布切れにタイプ印字され，片山の署名のあるその中には，「持参人，同志田口運蔵は日本人共産主義団（〔アメリカ〕統一共産党日本人支部〔Japanese Branch of U.C.P.〕）によって，第3インタナショナルの第3回大会に日本の立場を説明するための同志として選ばれた」とあった（490/1/208/10, cf. 495/18/65/130; ここに派遣組織が明示されているが，そのことについては第4節で取り上げる）。

なお，「田口と猪俣のあいだでソビエットへ先行を争う激しい対立があった」（鈴木茂三郎『ある社会主義者の半生』（文藝春秋新社，1958），118-119）と回想されているが，猪俣が派遣される可能性はそれなりにあったとみられる。というのは，田口はスコットからも英文と露文の紹介状を得たのだが，二日早く書かれた英文の方で，以下のように猪俣の名が先にタイプされ，それがスコットの手で田口と直されていたからである。「ブルックリン，N.Y.，1921年4月26日／関係者各位／同志猪俣津南雄／田口運蔵／が合州国の日本人共産主義者たちを直接代表し，そして間接的に日本の共産主義運動を代表する代表であることを本状により証明する，そして彼を彼の目的地に着くことを可能にするいかなる援助も大いに感謝されるであろう。／敬具／〔署名〕チャールズ・スコット／赤色労働組合インタナショナル・アメリカ評議会」（490/1/208/13）。

さらに片山は7月5日に，R. [リュトヘルス]へ田口を紹介する書簡を送った。「疑いなくあなたは田口運蔵に会って，彼の本分で彼を助けているであろう。……彼は最もエネルギーで有能で，そして頑丈な同志である。あなたが出来る限り多く彼を親切にも助けるであろうことを希望する」（495/108/11/26-28）。その時既に田口は，〔5月のウラルと〕クズバス炭坑の視察からホテル・リュクスへ戻ってきたばかりの〔1年後に実現する自治産業コロニークズバスの立案・準備に忙殺されていた〕リュトヘルスと会い，彼の紹介でコミンテルン第3回大会のさなか（6月30日頃）レーニンとの会見を果たし，片山による上記紹介状を手渡していた（田口運蔵『赤い広場を横ぎる』（大衆公論社，1930），46，81-88；

.10（ ，1979），579，586）。

1921年5月末モスクワに到着した田口は，上記紹介状を持参のうえコミンテルン第3回大会に出

席し、6月22日の第1回会議で挨拶の短い演説をすることになる(村田編訳, 15)。その際公刊議事録では「タケグチ」となっているが、それは偽名ではなく、誤記であったのではないか。なぜならば、元の英文タイプ原稿では既に「タケグチ」に変えられていたけれども(490/1/41/33)、露文タイプ原稿では「トグチ」()と“ ”を“ ”と誤っただけであったからである(490/1/40/9。なお「トグチ」の表記は、田口が資格審査委員会で審議権だけの代表と判定される書類でもなされていた[490/1/208/18])。

吉原もまた現地から参加し、7月12日の第23回会議で東洋問題についての討論で演説することになる(490/1/138/38-42; 村田編訳, 18-20)。が、吉原は既に、1年前の1920年7月19日に開会するコミンテルン第2回大会に向けて「日本の報告」を作成していた。それは『コミンテルン第2回大会への諸報告』の中に収録されたが、筆者のイニシアルを“J. K.”と意図的に記したかあるいは誤記したかで、従来人物を特定できなかった。今回の調査で私は吉原の英文原稿を見つけることができ、公表に際して最後のパラグラフの前後1パラグラフずつが省かれたことも確認できた。すなわち、前に「我々は同志片山の援助を求め、そして彼にいく人かのよき日本人革命家をアメリカから我々の仕事を手伝いに来るために選ぶことを頼まなければならない」とあり、「コミンテルンとの間に恒常的で緊密な関係を保つ」云々の公表分のパラグラフを受けて、後に「これをするために、どうか英語と露語の両方で読み書きできる一人のよき共産主義者を我々に供給してくれるように」とあった(5/3/672/1-3; 参照, 村田編訳, 7-10, 511)。これらは具体的な活動内容で恐らくありすぎたために省略されたのであろうが、10カ月後に田口が訪露してその実施へ向けて大きく踏み出すことになる在米日本人同志の訪露計画は、既にこの時期検討されはじめていたことになる。

在米日本人同志が片山に続いてメキシコへ行くことも計画にのぼったが、実現しなかった。それに関する動きについて記しておく。

1921年6月2日、片山は(恐らく在米)同志たちへ書き送った。「あなたがたのだれかがラテン・アメリカで働きたいならば、2カ月スペイン語を学べ。それから私のところへ来い。彼はここで地位を得るだろう。早ければ早いほどよい」と(495/18/66/1, 495/127/4/1)。これに触発されてか、島(間庭末吉)は7月6日書簡[未詳]でメキシコ行の意向を片山に告げた。その7月17日付返事によれば、片山は「あなたがここに来ることについて、私はいくらか前に手紙を書いたように、ニューヨークでの仕事を続けてもらいたい、強い支部を築くまで」と消極的だった。代わって、その中で重要な計画案が開陳された。「J.G. [Japanese Group]のための私の計画は、今年はT. [田口]がしたように、来年同志(私は律[石垣]を予定している)がM.O. [Main Office]へ行くつもりであることであり、次があなたの番であろう。……それであなたは今から準備しなければならない。太平洋岸と可能ならばハワイへ行くことは、非常によい準備となる。……通常のキャンペーンを開始するため、出来るだけ早く少なくとも250名のメンバーを得なければならない。それから同時に、印刷所と月刊誌、可能ならば週刊誌を準備しなければならない。金がないと言うな。金はあなた(がた)が固い決意と意志をもてば常にやって来るだろう」(495/18/66/38)。

この片山の考えは、同様に他の同志にも伝えられた。7月29日に片山は、その日に受け取ったロサンゼルス野中誠之からの同月18日付書簡[未詳]に即刻返事を出した。「あなたの帰国について言えば、当分の間あなたがそれをやめるよう私は忠告すべきだ。なぜならば、現況下であなた

は日本において何もすることができない。私はN.Y. に印刷所を設立しようと試みてきている。今度はきっとそれに成功するだろう。あなたが我々のためにそこへ行って働くことを望む。[後略]」（山内（2001），41-42）

（2）団の結成と声明

在米日本人社会主義団の結成および活動の実態については、従来当事者たちの（互いにかかなりの異同を含む）回想に依拠し、同団発行のリーフレット類の部分的利用によってしか明らかにされてこず、その上、それらの解明も史料的裏打ちがほとんどなされないままであった。私自身はワシントンの国立公文書館（NARA）での史料調査を再度試みる必要性を感じているのだが、それは後日のこととして、ともかく新史料もいくつか加え、同団の活動についての解明を本節以降で試みることにする。

片山が在米同志を糾合して「一大革命党組織」を創る計画を実行に移そうとしはじめたのは、早くも1917年末であった。そのことは1917年12月の『平民』14号に載った「全米の邦人同志者一大革命党組織計画」に明らかであったのだが、同号が未発見だったためにこれまで知られることがなかった。以下が官憲による写しの全文である（外交史料館，4.3.2.1-1(10)）。「過去数ヶ月来在米各地に散在せる邦人同志互ひに気脈を通して其統一を計らんと相互ひに相談をしたが今や暑ぼ相談も纏まりて一大団結を組織せんとする気運に至つた、近き将来に宣言書や党規を發表することとなるであらう。」

この片山の意向が野中誠之に伝えられていたことは、後者が岡繁樹に1917年12月7日付書簡で次のように記したことでわかる。「片山君から書状で一、社会党を組織して、名前だけでもかまはない、ニューヨークと桑港に支部を設置して主義宣言書を發表して紙上にだけでも大いに活動して政府に対して一つの示威運動の手段とすると共に日本の同志を激励し、又此国に居る同志を糾合したいものだと云って来ました」（岡直樹・塩田庄兵衛・藤原彰編『祖国を敵として——在米日本人反戦運動』（明治文献，1965），139）。

これら引用文で少し注意を要するのは、「主義宣言書」の發表が活動の具体的内容であり、日本政府への「示威運動」が目的にあげられていたことである。実は、これから出来上がる組織は、それ以上の活動を展開し、また、それ以上の目的が与えられることになる。

1919年10月29日から1カ月間ワシントンで国際労働機関（ILO）第1回総会が開かれた。それに派遣されてきた日本の労働者代表が実際に労働者を代表していなかったことを暴露した英文パンフレット『日本労働者の要求——日本政府が労働者に加えた野獸的反動政策に対する抗議』を11月6日午後「パンアメリカン、ビルデングの総会議場」で片山と田口が配った。そのパンフレットに「はじめて『在米日本人社会主義者団』という署名を使つた」との渡辺春男の回想が通説となっている（渡辺春男『片山潜と共に』（和光社，1955），65；参照，石垣栄太郎『片山潜とその同志たち——アメリカ放浪四十年——』（『中央公論』67巻14号，1952年12月，234-235；丘辺查[査]『『彼』=国際労働会議のエピソード=』（『新社会評論』7巻5号，1920年7-8月，25-26）。

けれども、類似の署名がそれに先行してあった一例が確認できる。すなわち，“The Committee of the Japanese Socialists in America”の署名のある「日本労働者への手紙」が、1919年7月の

『平民』22号の英文欄に載り、それは翌月9日の『ニューヨーク・コール』に再掲載された（*The Heimin*, No.22, VII.1919; *The New York Call*, 12 Year, No.221, 9.VIII.1917, 7）。内容は、大戦が終わったにもかかわらず、あなたがたの兄弟がシベリアで、秩序と平和を守るという口実の下にロシア人と闘い、彼らを殺戮していることに注意を喚起し、旧プロシアの軍国主義よりもヨリ悪く、最も残忍な日本の帝国主義者に仕えることで犯罪を犯すことをやめよ、と訴えたものであり、「目覚めよ、日本人労働者！ 世界の労働者の国際的連帯に加われ！」と結ばれていた。

その署名に「団（Group）」が抜けていることは、やはり気がかりであり、団としての結成は、以下の（決定的ではないが）史料によってほぼ1919年秋と言ってよいであろう。それは“Committee of the J. S. G. in A.”の署名のある「同志たち」へ宛てた5枚からなる英文タイプ文書であり、日付はないが内容から「我々の友〔単数形；恐らく田口であろう〕」が離米するに際してロシアへ携行させたものであろう。それによると、「『在米日本人社会主義団』は1919年秋に組織された」（495/18/66/298-302. 田口運蔵の取調文書（1922年）でも、「1919年11月頃」に「団体ヲ組織シ」たとある。平塚長崎県知事の水野内務大臣、内田外務大臣ほか宛1922年11月4日付機密文書、外交史料館、4.3.2.1-1(14)）。

ちなみに、その少し後も訳出しておく、「我々は今、成功のよき展望をもって公然と内密と両方で組織しつつある日本における同志たちと定期的な通信を確立している。我々は、日本におけるプロパガンダ活動が巧みなやり方で行われ、そしてインド人の同志たちと同様にいく人かの朝鮮人と中国人が今協同していると言えてうれしい」。この文末の情報には、1920年5月に高津正道らによってつくられ、近藤も連続講義で関わった暁民会からのもの含まれていたであろう。なぜならば、次のように「団体紹介」されていた記事も、田口出発直前に届いていたであろうから。「暁民会は、この〔第三インタナショナル創設の〕気運に依て出来た東洋の小さいインタナショナルである。日鮮台支の青年が、新たな精神で共同親密に新思潮の研究？に当つて居る」（『週刊』労働運動』7号、1921年3月20日、7；参照、高津正道「旗を守りて（四）」『月刊 社会党』58号、1962年4月、148-151、153-154）。

続けて、同団が出した文書類についてみていくと、1919年11月8日の『コミュニスト・ワールド』に「日本共産主義者、ポリシェヴィキを歓迎。日本における運動の力をロシア労働者へ報告」という見出しで同団の日付のない声明文が載った（*The Communist World* (New York), Vol.1, No.2, 8.XI.1919, 4）。気になるのは、野中、田口、そして片山連名の同団の名称がここでは“*The committee of the Japanese Communist Group in America*”となっていたことである。上述の11月6日に配布したパンフレットと時を同じくして出た文書が、なぜ「共産主義団」となっていたのか。同団のアメリカ共産党への加入については第4節で触れるとして、アメリカ共産党が創設されて既に3カ月がたった時点で同党の機関誌に同文書が載ることへの配慮を、編集側か片山側かがした故に変更された名称で、それは確固たるものではなかったろう。というのは、後述のように、その後の文書が再び「社会主義団」となっているからである。

内容は、在米日本人共産主義者がロシア社会主義共和国の二周年を祝してロシア共産主義者同志へ送った挨拶であり、その中で、ロシア革命のおかげで日本の労働者は覚醒し、1918年8月の米騒動以来ストライキや大衆運動によって支配階級に反抗している日本国内の労働運動についての報告

が、例によって楽観的になされている。そして最後に、シベリアで日本人兵士がポリシェヴィキに
加わり、多くのポリシェヴィキ宣伝が当地ならびに日本で続いている、とも報告されている。

同文書は、1週間後に『コミュニスト』にも再掲載された（*The Communist* (Chicago), Vol.1,
No.7, 15.XI.1919, 12）。それは、さらに推敲されていた。しかも、細かい変更は別にして、おおよそ
1パラグラフ分が削られたものの、5パラグラフ分が加筆されていた。とりわけ、日本、シベリア
ばかりか朝鮮、中国も新たに含めて、各地のロシア革命の影響下での運動の昂揚がさらに強調され
た。末尾も、「ロシア・ソヴェト共和国万歳！」だったのが、その後に「共産主義インタナシヨナ
ル万歳！」が加えられた。

続いて、1920年4月10日付の声明が、今度は再び3名連名の“*The Committee for the Japanese
Socialists[sic] Group in the United States*”の名で出された。同声明は、上述のように、アムステル
ダム・サブビューローに送られ、『トリビューネ』5月28日号に掲載されるが、アメリカ国内では
一足早く『ソヴェト・ロシア』5月15日号に載った（山内（2000），55。同声明の日本での公表は、
かなわなかった。同声明が秘密裡に堺のもとに送り届けられたのであろう、彼は5月23日の日記に
以下のように記し、その一文を公表するのが精一杯だった。「浦潮占領抗議書 / 在米日本人社会主
義団の片山潜、野中誠之、田口運蔵の三氏は、日本政府の浦潮占領に対する抗議を發表した」『新
社会評論』7巻4号、1920年6月、18）。

日本において同団の声明文が公表されたのは、上述の『日本労働者の要求』が「日本労働者の抗
議 国際労働会議派遣員に就いて」の題で3カ月後の『新社会評論』1920年2月号に載った
のが最初であろう（『新社会評論』7巻1号、1920年2月、16-17）。しかし、それは抄訳だったし、田
口運蔵は名を「卯之助」と意図してかは不明だが誤記された。

続いて公表されたのは、それからさらに1年以上たつ『社会主義』1921年5月号であった。原文
は、既に前年9月26日付で同団3名によって作成された「組織し特に一大活動を開始せんとす」
るその日本社会主義同盟に対する「決議文」だった。その中で片山らが強調したのは、日本でのそ
の新たな動きを以下のようにコミンテルンの活動と結びつけようとする事、すなわちそれへの加
盟要請だった。「今や第三インタナシヨナルは世界同志を糾合して世界的大活動を興し我等の使命
たる社会革命を断行せんとその宣言綱領を發表せり。吾人は我が同志諸郷〔卿〕が万難排して

此の世界的大運動に参加せん事を熱望す。」そこにはまた、「鮮支の先覚同志が既に之
に加盟して活動しつゝあることは諸郷〔卿〕の知れる所」とあるように、東アジアでの運動の呼応
が意識にのぼってもいた（『社会主義』9巻6号、1921年5月、21-22。犬丸義一は、半年遅れの公
表の背景に1921年4月24日の日本共産党暫定中央執行委員会の非合法結成があったと想定してい
る。犬丸義一『第一次共産党史 増補 日本共産党の創立』（青木書店、1993）、92-93）。

『社会主義』翌月号には、その「宣言綱領」の一つであるコミンテルン創立大会で採択された
1919年3月6日付の「全世界のプロレタリアートへの宣言」がようやく公表された。それもまた片
山らから送られてきたもので、末尾に「在米日本人社会主義団本部 / 大正九年十一月七日」の添書
がある（「第三国際共産党宣言」『社会主義』9巻7号、1921年6月、8-16。なお、同宣言の原署名
者は17名のはずだが、なぜか訳では5名しか署名がなく、しかもそのうちのトロツキーとジノヴィ
エフは誤りである）。

(3) アムステルダム・サブビューローとの接触

コミンテルンのアムステルダム・サブビューローとの在米日本人社会主義団の接触について、次にみていく。その接触の確たる証拠は、既発表のリュトヘルスと片山の通信自体であり、1919年末から20年前半にかけてコミンテルンと接触したのは、まさしく同サブビューローを介してのものであった。けれども接触の様子は、在米同志たちの回想にしか残されておらず、それらを引用するしかない。

渡辺の回想は、最初の『片山潜と共に』にはなく、13年後に書き直された方にしかない記述で、あとから整理されたきらいがあるが、それにはこうある。「日本から送られてくる新聞や雑誌から、重要部分を抜萃して英訳し、これをルトガースが主任となっているアムステルダムのコミンテルン情報ビューローに送った。これは多大の労力と忍耐を要する地味な仕事だったが、老人は田口らを助手に根気よくつづけていった。こうして送られた老人の論文が、この一九二〇年、はじめてコミンテルンの機関誌にのった。前にものべたシベリア出兵に反対して日本の政府を痛烈にやっつけている『東洋経済新報』の論調を、この論文でくわしく紹介し、日本にも『正論』のあることを示したのである」(渡辺春男『思い出の革命家たち 片山潜・トロッキー・スターリン・徳田球一など』(芳賀書店, 1968), 66-67)。

文中の片山論文とは「日本とソヴェト・ロシア」であり、それは『ソヴェト・ロシア』1919年6月21日号からの改行をふやしての転載だった(. . . ; . . . ,”

(Petrograd) No.9, [ca.IV.]1920, 1277-1280; S. Katayama, “Japan and Soviet Russia,” *Soviet Russia* (New York), Vol.1, No.3, 21.VI.1919, 13-14. さらに後者の初出は以下であり、再掲に際して末尾の数パラグラフが省略されている。“Who Are the Russian People?,” *The Heiminn*, No.21, VI.1919) シベリア出兵反対については、同団はサブビューローへ1920年4月10日付声明を送付し、それが『トリビューネ』5月28日号に掲載された(第1章第1節)。サブビューロー解散後も、片山は『東洋経済新報』1920年6月26日、7月3日両号に載った「尼港事件の悪用者」を摘要要約して送付したが、その解散が影響したかで、オランダでの公表の形跡は見あたらない。また、片山が送付した論文「日本の現実のシベリア政策」は、およそ1年遅れてオランダ共産党系の理論雑誌『ニーウェ・テイト』1921年9月5日号に掲載された(山内(2000), 57-58)。

より具体的に記されているのが、田口の回想である。「片山の棲んでゐた七十五丁目のアパートメントの一室を事務室にあてた。月払でタイプライターを求め、電話を引き、日本のブルジョア新聞の三面記事を英訳して、アメリカの社会運動の各団体及びアムステルダムに新設された第三インターナショナル情報局に郵送するのが初期の仕事の総てであつた。片山と田口の二人は不慣れな謄写版に苦められて、インキだらけになつて三十枚のレポートを拵へ上げるのに一日を費した」(田口運蔵『赤い広場を横ぎる』(大衆公論社, 1930), 334-335; 参照, 石垣「片山潜とその同志たち」234)。

ここで、サブビューローとの接触に関する傍証を一つ紹介しておく。田口は1922年11月1日に上海から長崎へ入港した時点から官憲の視察対象となり、その時の取調文書には、「本名ノ携帯シ居タル差替自在人名簿八滞米中片山潜ヨリ譲受タルモノニシテ有用ノモノニアラスト称スル」その名

簿に登載された23名が紹介されていた。そのうち国外の住所はハンプルク，ロッテルダム，シカゴの3件だけだが，真ん中の“Mr. W. L. Brusse Rotterdam Bergsingel 172a”は注目に値する（平塚長崎県知事の水野内務大臣，内田外務大臣ほか宛1922年11月4日付機密文書，外交史料館，4.3.2.1-1（14））。ブリュッセルはアムステルダム・サブビューローによって1920年元旦に設立された「国際歴史文書館」（Internationaal Historisch Archief）の事務責任者であったのであり，各国同志に機関紙類の送付を呼びかけていた（497/1/2/12）。まさしく片山らがニューヨークからそれらを送付した宛先が記載されていたのである。

（4）猪俣津南雄の役割とアメリカ共産党への加入

猪俣の指導的役割については，後年鈴木茂三郎の講演が触れている。「日本における共産党の成立につきましては，アメリカでの片山潜一派の活動をみのがしてはいかぬと思うのです。ただ共産党がこれをあまりとりあげないのは，実際計画的にやったのは片山潜でなくて，猪俣津南雄が主としてやったのです」（『鈴木茂三郎選集』3巻（労働大学，1970），21；参照，鈴木徹三『鈴木茂三郎（戦前編） 社会主義運動史の一面』（日本社会党機関紙局，1982），107；岩村登志夫『コミンテルンと日本共産党の成立』（三一書房，1977），128-131）。ここに遡及的評価の傾向性がたとえ隠されているとしても，これに近い猪俣評価が初めてルガスビの史料（後述）で裏付けられたことになる。

これに関連して鈴木徹三は，田口がモスクワへ出発「後，猪俣が指導者となり，アメリカ共産党のニューヨーク地区の常任委員になった」と記し（鈴木徹三，111。厳密には，典拠に「地区」委員とあったのを「常任」委員と誤記している。『鈴木茂三郎選集』3巻，23），在米日本人社会主義団員のアメリカ共産党への加入の有無の問題を取り上げ，そして「野中誠之警察聴取書」（1936年4月）を要約することで結論を引き出した。「八（一九一九）年，片山，田口，野中等相謀り『在米日本人社会主義団』をつくった。……一〇（一九二一）年コミンテルンの命令により二派の共産党が合流した頃，在米日本人社会主義団はそのまま米国共産党内に日本人グループとして抱合され，私もアメリカ共産党の一員となった。……日本人部代表者片山潜，日本人部最初の書記は田口，その後猪俣，つづいて石垣栄太郎が就任した」（鈴木徹三，112）。

上述のように片山による田口の紹介状には「日本人共産主義団（[アメリカ]統一共産党日本人支部）」とあり，「抱合」自体は確認できるが，その時期についてはなお特定しがたい。なぜならば，「統一共産党」は1920年5月末の不完全な統一から翌年5月末ようやく一つの「共産党」に統一されるまでの間の名称で，1年間の幅があり，また，上記「二派の共産党の合流」とは田口が離米した直後の1921年5月末の統一をさすと解されるからである。肩書についても未確定であり，それを明示する史料が見つかる可能性があるとするればFBI，軍情報部（MID）などの史料であると思うのだが，それを私はNARAで未だ見つけることができない。けれども，ルガスビで見つけた“Shima Hebotaro”（間庭）の1922年1月14日付手記「僕の露西亜行き」には「野中聴取書」を実質的に裏付ける記述があり，それを引用する。「其の[田口から書簡が届いた1921年8月3日]頃僕は……一週に火，水の二日暇間を貰つて紐育の僕の属してゐた米国共産党のミーテングへ出て」いた。続いて，当時猪俣が責任者となっており，スコットとの接触ももっぱら引き受けていたことが記され，

さらには「猪俣君が月曜日にス[コット]氏と会合して万事取計つて下さる事になつて[九月]廿一日水曜日に、片山氏より下された[モスコーに対する]クレデンシヤルにス氏のサインをいれたものと他に、露語と英語の紹介状を受け取つた」(495/127/26/1-39)。

最後に、片山自身が1919年9月初めに創設されたアメリカ共産党の党员であることを明示する史料を紹介しておく。

一つ目は、MIDが入手した1919年9月24日付文書である(*Correspondence of the Military Intelligence Division of the War Department General Staff, 1917-1941, RG 165, OG376304, National Archives and Records Administration, Washington, D.C.*)。それは、アメリカ社会党レフトウィング大ニューヨーク支部の中から設けられた15人組織委員会が、同日付でかつてのレフトウィング大ニューヨーク支部傘下の全地区組織に共産党への加入を呼びかけたものだった。具体的には、来る10月11日の晩に第1回市中央委員会会議を開催し、そこで共産党大ニューヨーク支部を正式に組織することをめざして、同会議への代表選出(各地区組織から1名ずつ、さらに50名のメンバー毎にか、あるいは地区組織内の主要なフラクションから1名を加える)を呼びかけた。その15人組織委員会の構成員名が文末に連記されているが、片山がまっ先にあり、B.D. ウルフ、H.W. ウィニツキー、J. ラヴストーン、そしてM. コーエン(書記; エイジェンシーのメンバーとなる)らが続いている。それによって、片山が早い段階から党の組織化に深く関与していたことがわかる。

二つ目は、片山が共産党员となったことを、司法省の特別捜査官が1919年12月の(コピーが不鮮明で判読しにくいのが恐らく)18日にニューヨーク市で証言した文書である(*Ibid.*; 以下の下線部はすべて大文字)。すなわち、「.....私は以下のことを知らされ、そしてそれが真実であるとまさしく信ずる。 / 1. セン・カタヤマが日本という外国の臣民であること / 2. 彼がアメリカ共産党の一員であること / 3. アメリカ共産党が合州国政府を暴力という力によって転覆することを鼓吹する組織であること、そして同セン・カタヤマが / (a) アナーキストであること (b) 彼が合州国政府を暴力という力によって転覆することを信じ、鼓吹し、そして教えていること (c)..... (d).....」この党员証言が、半月後のパーマー・レイドの該当者に片山をさせた。

(5) 本国派遣の近藤栄蔵らとの接触

近藤は1919年6月初めにコリア丸で帰国した(山内「ポリシェヴィキ文献と初期社会主義」115)。自らの回想によれば、「曾て片山と約束した日本共産党結成の地下工作に進んでゐた」(近藤栄蔵『コムミンテルンの密使 日本共産党創生秘話』(文化評論社、1949)、105)。近藤が離米した1919年5月段階で片山を含むアメリカ社会党レフトウィングがめざしていたのは、いきなり共産党創設ではなくレフトウィングの糾合であったのであり(拙著参照)、またこの少し後片山らは「在米日本人社会主義団」を結成するように、「日本共産党」との表現はあとの詠み込みであろう。

渡辺の回想では近藤評価はきわめて辛いのだが、ルガスビの史料によって明らかになったのは、渡辺の役割が大したことなく、その彼による回想が実際以上に自らの役割を過大気味に記述していたことである。その渡辺をしても、次のように記述していた。「しかし老人[片山]は、近藤の帰国後の活動にかなり期待をかけていたようであつた」(渡辺『片山潜と共に』68)。片山自身の回想によって補足すれば、「予の日本共産主義運動に対する寄与は、彼を送り帰して直接間接に其発展

に努めて来たことにある」（片山潜『わが回想』下（徳間書店，1967），294）。

その期待は、近藤の帰国直後よりもその後になくなったものであろう。なぜならば（上述のように）1919年秋に在米日本人社会主義団は創設され、その後運動を積極的に展開しようとする中で近藤との通信によってその期待は高まったであろうから。近藤の方も帰国後すぐに「地下工作に進んでゐる」たのではない。帰国後半年間、近藤は国際教育連盟設立に奔走し、「この失望と憤懣は私を完全に政治的に目醒めしめた。私はここではつきりと革命家になつたのである。……片山との約束一本で進む方針がここに初めて確立したのである」（近藤『コムンテルンの密使』59。なお、近藤の日本におけるポリシェヴィズム普及については、論文構成上割愛するが、さしあたり山川均へのその影響について論じた以下を参照されたい。山内「ポリシェヴィキ文献と初期社会主義」108；参照、同志社大学人文科学研究所編『近藤栄蔵自伝』（ひえい書房，1970），490，493）。

本国との具体的な接触については、依然詳細はつかめない。片山がモスクワのプハーリンへ送った1921年8月1日付書簡によれば、「日本から我々が得た最新のニュースでは、ニューヨークから送られた我々の最良の同志の二人が逮捕され、一人がまた逮捕されるかもしれない。」「戻ってきた同志の一人は今、炭鉱夫連盟と結びついている」（495/18/66/61）。逮捕者の一人は5月13日夜下関で拘留された近藤栄蔵であり、もう一人は松本愛敬であろう。中井正という変名をもつ松本は、ニューヨーク発大連行の北海丸に船員として乗船し、大連到着後4月9日に下船し、同月半ばに横浜に戻っていたのだが、「在米片山潜及田口運蔵（……）等ノ紹介ヲ受ケ山川ヲ訪問セルモノニシテ、同じく船員として同道した鈴木健輔とともに「過激主義書籍密輸企図二関」して憲兵司令官により6月9日付報告書で嫌疑をかけられることになる（外交史料館，4.3.2.1-1(12)『大正後期警保局刊行社会運動史料』（日本近代史料研究会，1968），73-74）。その松本は、上海へ向けて4月30日に東京を発つ直前の近藤と打合せをし、また5月7日上海到着を前に近藤が出した「五月五、六日下関局消印アル書面」を受け取った廉で拘留された。数度にわたって作成された近藤及び松本の各聴取書によりアメリカ帰りの二名の活動の一端が捉えられる。

まず、近藤からの押収物のうち「分団（予想）」には、印刷工組合信友会、暁民会、東京北郊自主会、L・L会など十数個の団体と各代表者名が列記されていた。「彼等八如上各地分団ヲ設置セリト称スルモ取調ノ結果未タ其ノ事実ナキカ如シ」との官憲報告があるが（『大正後期警保局刊行社会運動史料』46；松尾尊兌編『社会主義沿革（二）』（みすず書房，1986），121），それこそ4月24日に結成された日本共産党暫定中央執行委員会によって「日本共産党宣言」とともに作成され、近藤が上海へ密かに携行した「日本共産党規約」（495/127/9/11-18；村田編訳，484-489；なお、後者の「規約」は露語訳によっており、英語原文では「憲章」（Constitution）となっている）の中の「八、日本共産党の基本的な中核は『分団』（地方細胞）である。分団は10名の正党員で構成されるものとする。〔後略〕」の条項にもとづくものであり、このことによって少なくとも近藤らが「有望ナル赤色分子ノ集マリ居ル団体」の掌握に心がけていたことだけは明らかとなる。次に、近藤逮捕の新聞報道後直ちに松本が「焼棄シ」た二冊の「手帳二八金銭ノ出入、手紙ノ発送先、知人ノ住所氏名ノミ書イテアッタ」という。また、近藤は（承諾は得られなかったが）実弟近藤健三郎に宛名貸しを申し出ていた。いずれも在米同志との連絡に関係していたであろう（中川望山山口県知事の床次竹二郎内務大臣、内田外務大臣ほか宛1921年5月22日付文書及び附属書類，同1921年5月23日付文書，

中川山口県知事の内田外務大臣宛1921年6月11日付文書及び附属書類「近藤栄蔵陳述要領録取」ほか、外交史料館、4.3.2.1-1(12); 社会文庫編『大正期思想団体視察人報告』(柏書房、1965)、136-140; 参照、山泉進「大杉栄、コミンテルンに遭遇す (付)李増林聴取書・松本愛敬関係史料」『初期社会主義研究』15号、2002年12月、113-114。なお、上記「戻ってきた同志の一人」に関して、田口が片山に宛てたらしい[1922年]11月9日付書簡の写し(ラトヴィア政府の密偵によって写真撮影されたものを米国政府経由で外務省が入手)の中で、「作業服の坑夫姿で米国を追われたIWW会員志村捨松氏横浜に帰着」の記事が紹介され、「ユタの炭坑に居た」彼が「船で帰つて来た処をひつぱられた」とある[外交史料館、4.3.2.1-1(15)]。稀な経歴故にひょっとしたら志村が該当するのかもしれない。

上記片山のプハーリン宛書簡によれば、「我々の同志たちは4月にC.P.[共産党]を組織し、ニューヨークへ文書を送った、それらはきっとあなたがたへ送られたであろう」とあり、上記「宣言」と「規約」は近藤によってニューヨークの同志へも送られていた。けれども、1921年8月10日頃の佐田(猪俣)の田口宛英文書簡の官憲抄訳には、「近藤松本等ノ逮捕……後彼等八当分通信ヲ見合セラレタキ旨申来レリ」とあり、8月14日の佐々木(鈴木茂三郎)の吉原宛書簡の官憲抄訳によれば、「本件検挙ノ結果日米同志間ノ連絡」は「断絶」したのである(荻野編、1巻、59、60)。

ここで、日本官憲の外国在留邦人取締について付記しておく。1920年1月2日に始まったパーマー・レイドを機に、在米日本人社会主義団の3名をボリシェヴィキ支援の記事を「当地ノ『共産主義雑誌』ニ寄稿セル廉」で検挙し本国送還する動きがあることに対して、外務省は次のように反応した。「米国官憲が適法ニ送還スル義ナラハ止ムヲ得サル次第ナルモ目下ノ状態ニ鑑ミ社会主義者ノ本邦ニ帰来スルコトハ好マシカラサルニ付穩当ノ方法ニヨリ之ヲ阻止スルノ途アラバ可成阻止セラレタク……」(内田外務大臣の在シカゴ姉齒準平領事館事務代理宛1920年1月13日発暗号電信、外交史料館、4.3.2.1-1(12)参照、姉齒領事館事務代理の内田外務大臣宛1920年1月10日着暗号電信、同上)。ここには、在留邦人を取締るどころか体よくやっかい払いしたい、との日本官憲の本音が吐露されている。

4 在米日本人社会主義団(2)

(1) 在露田口運蔵からの招請

田口は入露後、在米同志へ書簡を送り続けたが、途中の第2、3信が届かず、第4信(1921年7月16日付、スウェーデンの切手に7月22日の消印)が8月3日に届き、三日後の佐田(猪俣)による長文の返事は、未詳の第4信の内容がおおよそ把握できるばかりか、彼らの活動状況と計画を知る上で最重要書簡である。以下、詳細に内容を紹介する(495/127/4/2-13; なお、二箇所の解読について九州大学大学院佐伯弘次助教授からご教示を得た)。

「コムインタルン[コミンテルン]は兄の帰米を肯じない。東洋に向つての在米日本人の活動の価値を重要視せぬ。東洋に向つては、米国からするよりもチタ上海からする方が遙かに合理的であり有効だからである。従てコムインタルンは兄に上海行を命ずるのみならず、吾々の内出来丈の多数が来てチタ上海の活動を援けんことを要求する。同時に、吾々の米国に於ける仕事は寧ろ消極

的な活動を以て足れりとするのである。」「日本と、米国へ或るもの〔資金か〕を持って来るといふ兄並びに吾々の目算は破れた訳である。」ここに在米での活動強化の「目算」があったことが判明するが、コミンテルン本部の意向はいわゆる「東回り」の運動の強化であり、そのため田口は第4信でさらなる派遣を「 [片山] 氏を筆頭として少くとも五人は来るやうに、勿論、中及び外にも来たい人があつたら、尚更です」と呼びかけた。「君の呼集に応じて行く者には、M〔間庭〕とW〔渡辺〕が確定して居る。米国に残る者には律〔石垣〕が確定して居る。他は未定である。……オールド・マン〔片山〕はあちらの仕事の関係上、今後少くとも半年は動けぬといふ事に承知して居る。……（スズ〔猪俣夫人ベルタ〕は彼を援ける為め近く出発する）」

「兄の手紙には、加洲とハワイの日本人に対する宣伝の必要を説き運動してアメリカのシー・ピー〔C.P. = 共産党〕を動かして機関紙を作れ、とあるが、それでは話が逆戻りした事になる。吾々が、下から行つたのでは到底動かし得ない、しかも、上から行けば訳なく動かし得る事を知つたが故に、それ故に兄の本部出張を絶対必要と認め、之れが実行に一同があつた通り骨を折つたのである。……此上は、兄が骨折つてコムインタルンからK〔片山〕に向けてインストラクションを出させるやうにせぬ限り到底駄目なことである。」しかし、この指示は実行困難である。「手不足の吾々の中から四人も来い、ロスアンジェルスの者も来いといふのでは、居残る者の手で大した仕事の出来る筈はない。そうかと思ふと、加洲ハワイ宣伝の機関紙を作るべく茲の党に運動せよとある。兄のインストラクションが甚だ明確を欠くといふのは此点である。」

「上から」の運動を重視する猪俣は、次のようにコミンテルンの意向に早々と賛意を表す。「僕の見るところでは、吾々にとつては米国に於ける仕事よりもチタ上海の仕事の方が遙かに大切だと思ふからである。且つ君も同意見だからである。」その理由は、「一、吾々の仕事は常に、究極、東洋諸国、特に日本の運動を促進するを中心目的とせねばならぬ事 / 二、此の目的には、上海チタからする方が、米国からするより遙かに有効なる事 / 三、上海チタへは、コムインタルンが本気で力を注ぐが、在米日本人同志の仕事に対しては然らず。…… / [四、五は省略]」（片山が在米での活動の重要性にこだわることは後述）

「然らば、僕自身の行動は如何。……僕は、近々一と先づ日本へ帰り、一と仕事した上で、必要あれば上海方面へ出るのが最も策を得て居ると思はれる。」その理由は、「一、对在米日本人宣伝を大々的に行ふのでない限り、僕が米国に止る必要はない。…… / 二、……米国で五十の同志を作るに要する時と努力を僕が、日本乃至上海で費したら、日本の運動に貢献し得ること数倍なるは疑ない。過去数ヶ月間に舞台は急速に展開した。……米国に居合せた処から自然と一国をなして居た吾々は今や八方に手分けして、各自が最も有効に其の能力を發揮し得るやうな場所と方法とに於て日本の運動を促進せねばならぬ時期に達した。日本の運動に向つて最大の貢献をなすべきやうに僕的能力を發揮せしむる僕の持場は、在米日本人に対する宣伝ではあるまい。兄も此点に於ては僕と同感であらう。同感故に、兄も僕をRTUI〔Red Trade Union International〕の上海局へ推薦して呉れたのに違ひないと信ずる。 / 三、然らば、上海のRTUI局へ行くべきか。僕はコムインタルンの命令とあればよるこんで行く。けれども同局に行く者は、局の性質上、日本労働運動の内情に精通して居ることを先決条件とする。荒〔畑〕や近〔藤〕は誠に適任であるが〔いずれも入獄中〕、僕はご承知の通り、日本の運動に関しては皮相の知識しかなく、何等のパーソナル・コネクションもない。

また主義者としても全然知られて居らぬ。…… / 四、外国語等の関係上、他に人がなく、僕が行かねばならないとしても、其種の地位につくに先立つては、是非日本の事情に通じて置かね [ば] ならぬから、一応日本へ帰る必要がある。…… / 五、前便に報じた通りのEK [近藤栄蔵] 及びHK [河本弘夫であろう] に関する不幸事は、此際特に僕の帰朝を痛切に必要ならしめると信ずる。元来人がなくて困つて居た事はKY [山川均] からの手紙に依ても明かである。然るに日本のパーティーは生れると同時に殆ど活動不能に置かれてしまつた。のみならず、一ヶ月程前にKYから、従来のアドレスは一切危険に就き当分通信見合せよと二行程の手紙をよこした俟、音信を断つてしまつた。かゝる際に役立つ筈の佐野からは全然便りが無い。」

「佐野」は未詳だが、8月11日に片山が岡(渡辺)へ出した返事には、「佐野は大丈夫だと思う。1週間前頃、野中から手紙があり、それによると佐野が日本に無事着いたとの手紙をもらったとのこと」とある(495/18/66/69)。

最後の理由に戻って、「六、北米、南米、上海と日本との連絡、共同動作を真に有効ならしめ得る人が是非日本に居なければならぬ。これからの仕事を有効にする為の連絡をとる任に当る者は、一方海外に在る同志を親しく識り、彼等の活動の性質と内容に精通すると同時に、他方には日本のリーダーに親近し得る者でなければならぬ。これは、佐野が健在であつても彼にとつては恐らく不可能な事である。」

「何れにしても、此際、僕が一応帰朝することは運動促進の全局から見て極めて必要なことと信ずる。上海行は、其上で決しても遅くないかと思ふ。……九月末乃至十月初め退米の予定で、帰朝の準備にかゝる筈です。」僕等の帰朝に御異存なしとせば、次きの二つの事を御願ひしたい。 / 一、上海局、チタ局のアドレスを出来る丈速かに知らして欲しい。局が出来ぬにしても、上海とチタに在る同志と通信の出来るやう適當のアドレスを知らして欲しい。米国と日本と両方一同時に知らして欲しい。米国の方はミス、ボイル [Miss Boyle] 宛でよし。日本の方は / 新潟県佐渡郡夷町 / 松瀬齒科医院 宛、 / 内の封筒には、本多時雄とすること。 / 二、日本へ帰るに就ての僕に対するインストラクション其他あらば、どしどし申越しを乞ふ。通信は右と同処あて。尚、念の為に、付記するが / トグトル、^マ村瀬、八六、レキシントン・アヴェニュー / 紐育市 / あてにて内の封筒に本多時雄としても届く。」

佐田(猪俣)は8月25日に再度田口へ宛て書簡を出したようで、それが届いたかどうか不明だが、官憲報告によれば(荻野編、1巻、62; 湯地幸平内務省警保局長の松平恒雄外務省欧米局長宛1921年10月12日付文書、4.3.2.1-1(13))、佐田の帰国と田口のシベリア経由での帰国をともに10月末に合わせようとの計画もあった。それに先だつ8月14日には佐々木(鈴木)が在イルクーツク吉原宛に書簡を出したが、それも官憲紹介によれば(荻野編、1巻、61)、佐々木らが東回りでモスクワに赴くのと逆の西回りで佐田は日本に戻り、シベリアでの活動との共同を一任され、以下のように佐田自身が中国へ渡る計画がそこでも記された。「佐田ノ上海ニ於ケル住所決定セハ之ヲ通シテ連絡シ得ルカ故ニ貴下 [吉原] ノ日本入りハ兎モ角モ見合せテハ如何警戒嚴重ニシテ危険ナリ」

それにしても、在米もしくは在墨と在露の日本人社会主義者間の通信が密使を使わず封書の宛先を工夫する程度で、参謀本部特務機関やロンドン警視庁などによっておおかた検閲されては(一部暗号数字化されたものが判読されず、誤訳が時にあったけれども)、彼らの活動が困難化するの

必定だったと言えよう。1922年1月調の「最近ニ於ケル特別要視察人ノ状況」では、以下のように把握されていた。「田口、吉原等八過激派本部ト折衝シ日本宣伝ニ関シ謀議ヲ凝ラシ内地、在米、在墨邦人主義者ト連絡ヲ取り居レリ其ノ通信交換ノ如キハ英国線西比利線經由ノ二方法ヲ併用シ文書ハ主トシテ英文ヲ以テ認メ地名、人名其ノ他重要ノ事項ハ数字ヨリ成ル暗号ヲ用テ居レリ又時ニハ上海、英、独等ニ在ル外国人過激主義者ヲ仲介トシテ通信シ居レリ」（『大正後期警保局刊行社会運動史料』34；松尾編，113）。

（2）入露および帰国準備

在米同志たちの入露に向けての打合せは、既発表の片山による佐田（猪俣）、佐々木（鈴木）、島（間庭）宛1921年8月21日付書簡と同じく（田口）運蔵、（吉原）太郎宛同日付書簡で念入りになされた（521/1/17/93-94，521/1/17/95；山内（2001），43頁で「同志T.」を吉原と推定したが、田口に訂正する）。ここでは、その抜粋にとどめる。

「同志島へ、T. [田口] のいるM. [モスクワ] へ到着するため、あなたが準備を開始し、レヴァル行の蒸気船への職を得るチャンスを見つけることは非常に良い考えであろう。……あなたがレヴァルに到着するやいなや無事ロシアに入れるよう、私はあなたに信任状を与えるつもりだ。」

「同志佐田が帰国しはじめるのは非常に時宜にかなっている。それが早ければ早いほどすべての当該政党にとってより良いと思う。とりわけ、あなたがたすべてが感じているように、我々は本国との良い連絡関係がほしい。彼は帰国するとすぐ彼の教授職の故に多くの仕事をする事が出来る、少なくともしばらくの間、つまり彼が中国における仕事のために用意をすることが出来る間は。」

ここで在米活動の重要性が強調された。「あなたがたは皆アメリカでの仕事を認めなければならないし、我々はその仕事をずっと押し進めなければならない。この点について私はあなたがたと、特に同志佐田とほとんど意見が異ならないかもしれない[上述のように実際は異なった]。本国でのプロパガンダに関する限り、私はあなたがたに同意するのだが、アメリカからよりも上海やチタからの方が疑う余地もなくより良い。しかし、かの地で指導者を補充することは、かなり難しだろう。それであなたがたのような人々を得るため、我々はアメリカにおいて探さなければならないし、彼らを本国での将来のプロパガンダ活動のために鍛えなければならない。」「あなたがた（3名）が去ることでJ.G. が弱まるであろうとは、私は信じない。……我々は既に3名を本国へ、1名をヨーロッパへ送ったが、しかし彼らが去った時よりもより強くなっている。」「アメリカにおける日本人が当地の出来事よりも本国の出来事によってより鋭く影響されるということは、歴史的にほんとうだ。日本の労働および社会主義運動が成長するにつれて、アメリカにおける日本人は共産主義者の声に耳をかたむける用意がきつと出来るだろう。このことはまた、我々が我々自身の同国人の中へのアメリカのプロパガンダを無視すべきでない理由である。私は本社へその効果について書くだらう。それで彼らはその仕事の必要性を認めるだろう。」「印刷所について言えば、私はまだその信念を失っていない。……同志太郎が1樽のマグネシウム [千ドル] をY. [Yavki = 片山] の旅費として合州国へ送った。私は彼の友人へ、彼にそれを印刷所へ向けるよう言ってくれるように書いた。」「最後に、あなたがたすべてがJ.G. の将来に気をつけることは非常に非常に必要だ。それが困難なしに進められるであろうように、疑いなく同志T. は商品を送ってくるだろう。」

「我々が日本に向って国際的に活動致すのは此時であると我々同志は信じて居ります」と同時期に片山は、アメリカ西海岸の日本人同志へ書き送っていたが（H. Hoshi [片山] の平本忠，西村義雄ほか2名宛 [1920年] 7月2日付書簡，二村一夫「片山潜の未発表書簡について」「パーマ・レイド」前後とモスクワ便り」、『資料室報』（法政大学大原社会問題研究所），259号，1979年10月，4），その在米活動の重要性は，田口と吉原宛書簡でも繰り返された。「ついでながら，親愛なるT. [吉原]よ，あなたがニューヨークのJ.G. へ送ったその金に話を向けたい。それを我々は，週報を刊行するため印刷所を始めるのに非常に必要とする。我々が活字と機械を買うことが出来るようにしなさい。」「あなた [田口] の手紙が示しているように，東洋において我々のプロパガンダの仕事をするには絶対に必要であり，アメリカからよりより効果的である。直接本国でのプロパガンダに関する限り，あなたの考えに完全に同意するが，しかし私はあなたに，来る闘争において大衆を指導し，革命運動を，ついにはプロレタリアート独裁を統制する人々を我々は補充したいということをお願いしなさい。これらの人々を，少なくとも現在極東においてあなたがたは獲得できない。我々はアメリカを，時折我々の新兵を得るところの一種の共産主義訓練学校にしなければならない。プロパガンダ活動に対する新人を得るため，かくして我々は戦略的地点としてJ.G. に頼らなければならない。……我々はJ.G. がアメリカとハワイ中に広げられることを必要とする。これをするため，我々は本社からの金とより多くの支援が必要だ。そのことをかの地の同志たちに伝えてほしい。」

本文中の「週報」とは、『労働運動』1921年6月25日号に掲載された在米“CHIYO”[未詳]の「在米日本社会主義者の運動」の中に、「近々，雑誌『革命』を発行し，全米に大々的の宣伝を試みる筈になつて居る」とあり，この『革命』をさすと考えられる（『(週刊)労働運動』13号，1921年6月25日，3；参照，荻野編，1巻，63-4。同記事は団の組織拡大についての重要情報（ただし誇張を含む）をもたらしているが，同誌では同時期，伊井敬 [近藤] の「ボルシエヴィズムの戦略」が連載中であり，近藤による記事の仲介があったと推定される）。今のところ『革命』創刊の形跡は見あたらず，上掲9月17日付佐々木の在露吉原宛書簡の官憲抄訳に次のようにあるように，太郎が送った1樽（千ドル）は届かなかったのかもしれない。「紐育二印刷局設置ヲ企テ其資金八先二吉原ヨリ片山宛送金セル一千弗期待ス然ルニ右行方不明ノ為メ送金ノ確否並ニ所在ニ附キテ紐育ノ…石垣栄太郎工通報依頼ノ件」。また，「在露同志ヨリ送金ヲ受ケタル模様アリ」との「最近ニ於ケル特別要視察人ノ状況」（1922年1月調）の中での記述もあるものの，現地からの直の報告によれば，この計画は「実行ヲ見スシテ止メタリト云フ」（『大正後期警保局刊行社会運動史料』33；松尾編，113；熊崎恭在紐育総領事の内田外務大臣宛暗号電信，1921年12月4日，外交史料館，4.3.2.1-1（13））。

吉原と田口の在露中，とりわけシベリアにおける活動については，次稿で扱う予定だが，吉原の上海行さらに日本行が帰国する猪俣の任務と関連していたが故に，若干触れておく。

1920年7月半ばにロシア共産党（ボ）中央委員会シベリア・ビューローに附属して東方民族セクション（東方人民部）がイルクーツクに創設され，翌月から活動を開始した。その中に民族別のサブセクションが構成されたが，日本部は日本語に通じた活動家が不在のため当面組織されなかった。12月下旬頃，吉原のイルクーツク到着を待って日本部の活動が開始された。吉原の最初の任務は日本語による文献印刷と日本への輸送の技術的機関の整備だったが，その任務終了後彼の日本への出

発が考えられ、彼の出發後はグレイ（B.P. Gray [. . .] 1年後に訪日し「グレイ事件」を起こす）を日本部の後任にする段取りまで決められた。吉原はひとまず上海への出發を望み、コミンテルン本部へも同意を求めて打電した。東方民族セクションとしては、アメリカ（片山）との連絡をつけるとともに予め上海で吉原が必要とする準備をすべて終えたあと彼の出發を考えた。この間、日本との接触の確立はウラジヴォストーク支部と上海支部（ヴォイチンスキー）とで試みられ、それぞれ2名の朝鮮人が日本へ派遣されたりした。コミンテルンの東方政策はまもなく 東方部に統括されていくのだが、その第一歩はロシア共産党附属で当初実現した諸構造の統合をめざしてそれらをコミンテルン管轄下に移すことであった。1921年1月5日のロシア共産党中央委員会決議および同月15日の 小ビューロー会議決議により、東方民族セクションがひとまず解体され、再組織化されることになり、かくして 極東書記局がイルクーツクに創設され、2月末に活動を開始した同局の中の日本部において吉原らの活動は継続された（ . . . / . . . / . . . , 1919-1943 (. . . , 1997) 26-28; . . . (1920-1922 . . .) (. . .) (. . . , 1996) 148-151, 155-156, 168, 175-178; (. . .) 1. 1920-1925 (. . . , 1994) 48-50)

ところがコミンテルンは一方的に、1921年8月26日の 小ビューロー会議で、当時11月1日にイルクーツクで計画された極東諸民族会議に間に合うようモスクワへ来ることを片山に正式に要請することになる（*Die Tätigkeit der Exekutive und des Präsidium des E.K. der Kommunistischen Internationale vom 13. Juli 1921 bis 1. Februar 1922* (Petrograd, 1922) 141-144; 村田編訳, 21）

在米同志たちの入露計画がほぼ固まった時点の9月4日に、片山はブレイ（A. Bray; ヤンソンの別の偽名）に伝えた。「極東宣伝局（Far Eastern Propaganda Bureau）[正式には、上記の極東書記局]が、出来るだけ多くの日本人同志を、その任務のため自身を準備するためにP[プロパガンダ]・スクールに入らせることを決定した。……F.E.P.B. が彼らの渡航を資金援助するだろう。しかし、いくらか時間がかかるだろうから、彼らは出来るだけ早く発つためあなたに資金援助を欲している。今私はLilbit [フレイナ] とそのことを相談し、彼は直ちに我々が資金援助すべきことに同意する。リストの一番目 [間庭] は、直ちに今月半ばに汽船のコックとして発つことを欲しているので、彼の面倒をみてほしい。残りの者は資金が準備できしだい発つ準備が出来ている。……彼らの面倒をみてほしい。彼らすべてに信任状を与えてほしい」(495/18/66/95, 495/18/66/140. 後者の文書では暗号数字が解読されており、下線部がそれに該当する。次も同様)

さらに同じく9月4日ブレイ宛別書簡で、片山は伝えた。「極東に送られるべき労働者の他に、同志田口は我々に次のように書いてきた。事が順当に運べば、F.E.P.B. はアメリカ合州国に一代表を送り、彼に給料を支払うだろう。しかし、これがなされる前に、田口は一同志に給料を支払うことを望んでおり、その同志は石垣であり、彼は現在のJ.G. のリーダーである。……F.E.P.B. は、これまで極東で主義のために労働者を得ることが非常に困難だとわかる。我々は合州国にいる日本人

に目を向けなければならない。私は、アメリカとハワイにおいて日本人の中で組織活動に全時間を割くことの出来る少なくとも1名がいるよう、その問題に立ち入ることを望む」(495/18/66/96, 495/18/66/141)。最後まで片山が在米での活動にこだわっていたことがわかる。片山には1914年9月の再訪以来アメリカで困難の中やってきた『平民』刊行などの活動を無にするわけにはいかないと、の思いもあったのではないか。

「現在のJ.G. のリーダー」であることが明示された石垣の偽名について触れておく。1921年12月9日にK(片山)が入露目前のリガから石垣へ宛てた書簡の中で、「私があなた気付で100ドル送りつつあることを井上律太郎へ伝えてほしい」とあり、さらに「律がお金を送ったあとに」云々と三つの名が出てくるが(495/18/66/202)、それらはすべて同一人物であるとほぼみなしてよい。なぜならば、11月5日にベラクルスとハヴァナからの清田(片山)の両書簡に対して返事を「律太郎」が出しているが、筆跡は明らかに石垣のものである。その傍証もあげておけば、1922年「三月一日付『イスクラ』ナル謄写版權赤紙小冊子何者カノ手ニ依リテ在留邦人間ニ配布セラレ候……主タル執筆編輯人井上律太郎ノ何人ナルヤハ不明ナルモ右ハ多分偽名ナルヘク真ノ編纂人ニ就テハ諸説アリ今日迄判明セサルモ前頭機第一号[2月9日付]中ノ石垣栄太郎(旧紐育新報社々員)ヲ中心トスルモノナルヘシト観測スルモノモ有之候」(熊崎在紐育総領事の内田外務大臣宛1922年4月7日付機密文書, 外交史料館, 4.3.2.1-1(14))。

なお、同じく9月4日、受け取った在米“Honda”からの書簡への返事として片山は次のように書き送ってもいた。「アメリカにおける仕事について、私は今晚同僚[フレイナであるう]と相談するであろう。それで二、三日以内に知らせる。そのことについて律[石垣]に知らせてほしい。」「アメリカ合州国での日本人の仕事について、我々が決定した時、私はきっとS.へ書くだろう、あなたがたが実質的な成果を得るようある種の権威をもって」(495/18/66/97)。“Honda”は上述のように佐田(猪俣)の偽名である本多時雄であり、そのことは本文でも「あなたは英語で朝鮮人や中国人を教えることが出来るだろう」や「私はあなたが彼女[ベルタ]に定期的そして頻りに手紙を書くであろうことを望む」とあるところから確認できる。“S.”については、石垣の場合と同様、別人を装って佐田とも考えられそうだが、「ある種の権威をもって」決定を伝えるべき相手は、スコットであろう。同9月4日にブレイに宛てた上記片山書簡の内容との関連性が、その傍証となる。

両書簡での提案に対するスコットからの返事は、10月1日段階で(恐らくそれ以後も)片山は受け取らなかった、その間一、二の書簡をスコットから得たにもかかわらず。片山がニューヨークの日本人同志たちから聞いたところでは、「彼らの一人[猪俣であろう]が同志S.に会ったところ、彼は彼らを助ける手段をもたず、その上、カナダに向かって発とうとしていた」(495/18/66/136-144)。

結局、資金はスコットの方ではなく、片山とトムソン(フレイナ)側のパンアメリカン・エイジエンシーから4名へ計1,000ドルが前払いされることになった(495/18/66/134-135)。そのことは片山のニューヨークの「同志たち」宛9月29日付書簡で伝えられた。「あなたがたに以前書いたように、昨晚友人[フレイナ]と会い、その問題を話し合い、石垣へ1,000ドルを銀行為替で一両日中に送ることを決定した。I-fujin[猪俣夫人]が佐田君に、彼が三郎君[鈴木]と一緒にその問題を整えられるよう打電するだろう。」「私は諸君の渡航について手配をした。……野中については、私

は彼に必要書類をすべて送る……しかし彼は最初にあなたがたのところへ来，大西洋経由で行くべきである。私は彼の費用のために400ドル，残りの人たちにそれぞれ200ドル供給した」（495/18/66/132）。

間庭は，資金提供を待たず9月30日に，（片山が想定したレヴァル行ではなく）黒海行のドイツ籍貨物船で出帆した。その出発準備から入露直後までの詳細は，本人によって時を移さず上述の「僕の露西亜行き」に書き留められた。

なお，同9月29日付書簡末尾で，片山は猪俣の帰国について言及した。「佐田は帰国しつつある。彼は最も安全で，最も有利なルート，すなわちヨーロッパのルートをとるべきだ。彼は直ちに出發すべきだ。」猪俣はその意向には添わなかったようで，太平洋を横断して恐らく10月1日朝横浜港についた（藤田悟「猪俣米国留学考」『猪俣津南雄研究 - 3 - 』14号，1972年12月，63）。なぜ猪俣が日本および上海での計画を実行に移しえなかったのか，は改めて探究されなければならない。

野中に入露後，「入露事情と経過」を記しており，その書き出しだけを引用する（495/127/6/2-8）。「在露国，田口，吉原の両君から第三・極東局宣伝部に働くべく通知を受け，第三-[インタナショナル]米国代理人片山氏から信任状を貰ひ，北米加洲羅府を出發したのは一九二一年十月十二日。十七日ニューヨーク着同地の諸同志から種々の事情を聞き，出国の手続をすまして同月二十二日ニューヨークを出發。三十一日英国リバプール着，十一月一日早朝ロンドンに行き，三日朝同地発，夕刻仏国パリに着く。五日朝パリ発六日独逸ベルリンにてニューヨークから先発した，鈴木，渡辺，二階堂の三君と落ち合ふ。独逸共産党は我等の為に種々の便宜を与へ，一万二千マーク補給す。」その後11月19日のモスクワ到着から極東諸民族大会直前までの記述は省略するとして，何よりも入露の目的が「極東局宣伝部に働くべく」と記されていることが注目される。

本章を終えるにあたって，同団の「主要な意義」を片山自身が極東諸民族大会へ以下のように報告していたことを記しておく。それは「日本の社会主義運動と第三インタナショナルとを結びつけることに，また日本での活動のために共産主義的闘士を養成することに，努力した点にある。同団は，すでに数名の同志を日本とロシアに送り込んだ」（

（ ，1922）137；村田編訳，101）。

5 片山潜のモスクワ行とパンアメリカン・エイジェンシーの解散

当初片山は，自らのロシア行にはパンアメリカン・エイジェンシー議長としての職務から否定的であった。1921年7月21日に片山がメアリ・マーシーへ送った書簡によれば，「去る5月半ば以来，私は地下へ潜らなければならなかった。」「こういう事情だから，私は太郎の要求に応ずることができない。私はいくらか前に他の経路から太郎の手紙のコピーを得た。彼が私にすることを望む彼の仕事以上におお重要なビジネスを私がしてきていることについて，すぐにあなたが彼に手紙を書いてほしい。ノツイで，手紙を書く時，私の[ロシア行の]費用として彼が送る金を，広告業を営むために印刷所を始めようとしているN.Y.の日本人会社へまわすよう言ってほしい。もし太郎が同意するならば，L.[恐らくレーニン]と彼の友人たちは反対しないだろう」（495/18/66/48）。

にもかかわらず，片山がモスクワへ行かざるをえなくなったのは，パンアメリカン・エイジェン

シーの解散問題とも関わっていたからである。

既に1921年9月16日にブレイは、ニューヨークから片山(Y[avki] & Co)へ「私は戻って来ている人から、本社においてはエイジェンシーもまた廃止されるであろうとの感情が広がっているとの情報を与えられている」と伝えると同時に、「私は、Yav-[ki]氏が直ちに本社を訪問するであろうとのB.B.CO.[本社]からの電報を受け取っている。……きっとYav-はここにはもはや戻らないであろう、なぜならば非常に重要な仕事がむこうで彼を待っているから」と伝え、エイジェンシーの活動自体への意義をこの時モはや当事者の一人であるスコットは認めていなかった(495/18/66/121)。

本書簡と行き違いに同日ブレイへ宛てた書簡で片山は、(スコットが連絡を密にしないなどの片山からの不平をまともに取り上げようとしない)アメリカ共産党中央執行委員会の(ブレイが9月8日付書簡で知らせてきた)返答を受けて、次のように伝えた。「全般的な権限は……その議長としての私自身にヨリ帰属している。あなたはこの権限を無視している。」「それ故、エイジェンシー議長として(そしてLibbit[フレイナ]との合意の下に) / 1) 私はエイジェンシーのメンバーとしてのあなたへの権限委任を一時的に取り消した。…… / 4) もし私があなたからこれらの指令を受け入れる電報を受け取らないならば、私は本社にあなたの驚くべき信じがたい行為と規律の欠如について書くだろう」(495/18/66/116)。

9月24日には直接ジノヴィエフへ宛てて片山は、本年1月8日にその任務について以来のエイジェンシーの全容を再検討した上で、次のように問うた。エイジェンシーがすぐに清算されるであろうとの話がほんとうであろうとなかろうと、我々に手段と力がある限り、我々は仕事を続けるべきである。が、このような状況下では困難をきたすので、その真偽を早く知りたい。「合州国の同志たちは、ラテンアメリカの労働者を見下すことに慣れている。個人的に私は、エイジェンシーの位置選定は結局のところ賢明だと思う。メキシコはラテンアメリカとももちろん中央アメリカにおける共産主義運動にとってまさにその鍵である」(495/18/66/122-124)。この段階においても片山のエイジェンシーにかける熱意は失われていない。

さらに4日後、片山とフレイナは連名で小ビューローへ、最新の活動報告をしたうえで、改めて問い、そして提案した。「コミンテルンがアメリカン・エイジェンシーを清算しようと思っているとのうわさがニューヨークから我々に届いた。……もしほんとうならば、その時我々はあなたがたに、メキシコにあなたがたの代表として資格のある一共産主義同志をここで支援活動するために送るよう提案する。もしそうでなければ、すべての運動はばらばらになる」(495/108/11/42-46)。

10月10日(下書の日付は10月4日)に片山とフレイナは連名による小ビューロー宛報告としては最後になるものを送った。「エイジェンシーのメンバーの一人(あなたがたは誰かを知っている)の即刻出発に関するあなたがたの指令は、実行されつつある。 / 多くのうわさが我々に届いているけれども、我々はエイジェンシーの資格についてあなたがたから明確なものはなにも得ていない。」そうはいうものの、片山出発後もフレイナを議長代理に選ぶなど、活動を継続する意欲が表明された(495/108/11/47-50, 495/18/66/156-159, 495/18/66/237-240)。

しかし実は、同じ10月10日にモスクワの幹部会会議で、「ビューローは解散される」こと

が決定されていた（*Die Tätigkeit...*, 240）。10月15日には、スコットがジノヴィエフ宛にまとめた報告を行い、片山とフレイナの活動（直接的にはメキシコ共産党創設）について「あまりにバラ色の外観を装いつつあり、「多くの話があるが、なにももの結局そこから生まれない」と否定し、「エイジェンシーの即刻解散」を提案し、片山については「同志はあなたがたのところに呼び寄せられるべきである。彼は東方の用務に非常に役立つであろう、しかるに一方、ここでは非常にわずかしが役立たない」と最終的に判断した（495/18/66/171-181, cf. 495/18/66/245-246）。

10月1日時点で片山は、スコットが自分のメッカ〔モスクワ〕への招集とエイジェンシーの廃止とに関係しているとの判断を書き留めた。エイジェンシー解散の原因については、稿を改めて本格的に究明する必要があるが、ことモスクワ行については、本社すなわち からの指令故に片山は従わざるをえなかった。既に片山は、スコットからの上記9月16日付書簡が届いた同月25日の晩、フレイナ宅へ行き、本社からの自分に関する権限委任をフレイナに知らせ、モスクワ行を実行することを決めていた（495/18/66/136-144）。片山の派遣費3,000ドルもまた、上記の在米同志4名の派遣費支払に引き続いて、エイジェンシーが支出することになった（495/18/66/160）。

1921年10月28日、片山は「鈴」（ベルタ）を伴って、フランス汽船（Espagne）でベラクルスから出帆した。11月14日、サン・ナゼール港からパリに到着し、8日間滞在中に片山はラポポール、カシャン夫妻と会い、彼らに『ユマニテ』への日本通信員として佐田（猪俣）の名前を教えた。11月23日、ケルン経由でベルリンに到着した（Cf. 495/18/66/203-205）。ベルリン滞在時に片山が寄稿した「今日の日本」は、『ローテ・ファーネ』12月13日号に掲載される（Sem Katajama, “Das Japan von heute,” *Die Rote Fahne* (Berlin), Jg.4, Nr.570, 13.XII.1921, 1-2）。その中で、日本の政治・経済の現況が概観され、対朝鮮・中国政策が日本を「極東のプロイセン」にしたと記されたあと、次のように結ばれた。「戦争を通じて教えられた日本人民は、官僚主義的政府と軍国主義的独裁政治を全く信用していない。不満と不平は急速に増大しつつある。これらすべての理由により、日本は社会革命の機が熟しているといえる。」なお、冒頭に「ロンドン、12月9日」とあるが、恐らくカムフラージュであり、その時既に、片山はベルリンからリガに到着していた。

12月8日にリガから片山は“H. Kano”（横浜正金銀行ニューヨーク支店長加納久朗子爵）へ通信した。「本日、700ドルをあなた名義の銀行へ送る。……『東洋経済新報』の石橋湛山氏へ100ドルを、……ニューヨークの石垣栄太郎氏へ100ドルを、それぞれ転送してほしい。残りは、私からの次の通知があるまで預かってほしい」と（495/18/66/199）。手順が逆だが、石橋には三日後に『大阪朝日新聞』、『東京日日新聞』、『解放』、『改造』など1年ないし6カ月間の定期購読と『労働年鑑』、小作人ないし労働者の運動等に関する書籍の送付を依頼し、ベルリンの送付先（c/o Büro-Hous[sic] Vulkan, 38 Rosenthalerstrasse, Berlin）を知らせた（495/18/66/209）。石垣には12月9日に、「井上律太郎へ伝えてほしい、私があるあなた〔石垣〕宛へ100ドル送りつつあることを。『日米新聞』（サンフランシスコ）、『日布時事』（ホノルル）の定期購読と、日本に関する5、6冊の書籍の支払にあててほしい」と書き送った（495/18/66/202, cf. 495/18/66/200）。同日、『日米新聞』の社主である“K. Abiko”（我孫子久太郎）にも直接、同紙のベルリン送付を依頼し、支払は「井上律太郎もしくは石垣栄太郎」がすることを伝えた（495/18/66/201）。さらに12月10日、ラトヴィアの国境の町（Zilupe）から“T. Sada”（佐田俊雄＝猪俣）へ書いた。「これまで私があるあなたに手紙を書か

なかった理由は、[同伴している] ベルタがあらゆる機会を利用してあなたに書いてきているからである」と前置きがなされた後、上記パリ滞在時の内容が報告された(495/18/66/203-205)。

このように途中で通信を経て、ついに片山はモスクワに到着した。到着日は従来、12月14日とみなされてきたが、上記「僕の露西亜行き」によれば、「十二月十一日日曜日、片山老兄モスクワに来る」とある。片山自身が、上記12月10日付佐田宛書簡で「今や我々の旅は明日午後2時か3時に終わるだろう、その時刻にモスクワに到着するのを期待する」と記し、そして翌11日「モスクワ行の列車上、ロシアのどこか」で石橋に宛てた上記の書簡では、「そこ[モスクワ]に我々は深夜に到着するだろう」と記しており、11日深夜に到着したとみられる。

なお、当時在紐育領事の把握したところでは、「片山入露ノ目的ニ就テハ確ナル処ヲ知ルニ由ナキモ紐育ニ於ケル宣伝費用ヲ露国側ヨリ入手センカ為ナルヘシト観測スルモノアリサレド又露国政府ノ為ニ支那朝鮮ニ於ケル過激主義運動ヲ助長セントスルモノナリト云フモノアリ」(熊崎在紐育総領事の内田外務大臣宛1922年2月9日付機密文書、外交史料館、4.3.2.1-1(14))。いずれの観測も的を外してはいなかったと言える。

後者の目的に関して直ちに片山と元在米同志たちは、直接日本からの派遣代表がモスクワに到着するのを待たず、極東諸民族大会への準備に入った。同大会において「極東における社会革命」および日本共産党綱領作成の基礎が築かれていくのだが、実は片山には少なくとも1年(取りようによっては、それ以上)前からそれらに向けての理論的準備が徐々に進められていた。その分析を最後に章を改めて行うことにする。

6 片山による理論的準備

1920年6月23日に片山は、リュトヘルスの上述の「極東における見通しについて、私はあなたの意見に賛成だ」と返答した(第1章第2節)。その世界革命のために極東における運動の発展が重要であるとの認識を片山自身が深めていき、それが「極東における社会革命」および日本共産党創設の理論的準備となったといっても過言ではない。以下、そのことをみていく。

それに先だって、片山が第2インタナショナルと訣別し、第3インタナショナルへと理論的にも移行していたことを確認しておく。

『レヴォリュショナリイ・エイジ』1919年1月4日号で、片山はフレイナの『革命的社会主義』を書評した(S. Katayama, "The Socialism of the Left," *The Revolutionary Age* (Boston), Vol.1, No.12, 4.I.1919, 6)。それは推薦文に近く、理論的内容の伝わりにくいものだったけれども、フレイナの同書を評する中で片山は次のことを確認している。「第2インタナショナルの社会主義的戦術と政策は死んだ、そして第3インタナショナルのそれらが、すなわちレーニンとトロツキーによって1年以上の間たいそう著しくうまくロシアにおいて広められ適用された根本方針と戦術が、代わって起った。」

このいわばアメリカ・レフトウィングの共通認識を、ほぼ1年後片山自ら原稿に記すことになる。地下潜行中の1920年1月から2月の間に書き下ろされたと推定されるその原稿は、1948年に『搾取なき社会への熱情』、1970年に『革命的社會主義への道』とそれぞれ題して二度出版されるのだが、

その中で，上記書評で確認された認識がヨリはっきりと提示された。「如何にして社会主義を資本主義の社会に実現するかという問題について，現在では二つに大別することが出来ると思う。……その二大別とはすなわち第二インターナショナル派と第三インターナショナル派とである。」前者に対して後者，すなわち「左翼派，または急進派と称する一派は，ロシアのボルシェヴィキ党（今は共産党と改称）を中心として，政策は非戦主義をもって立つ。……資本家戦争に反対するのみならず，さらに進んで赤軍組織の必要を説き，革命手段をも辞せざるものである。議会派の社会主義者と異なる最も著しい特色は，純労働者政治，ディクテートルシップ・オヴ・プロレタリアである」（岡田宗司編『革命的社會主義への道 - 片山 潜遺稿 - 』（刀江書院，1970），162-164）。（続いてプロレタリアート独裁の中身が片山によって紹介されるのだが，既に分析したように〔拙著，196-198，204-208〕，それは1918年初め以来フレイナを中心にアメリカ・レフトウィング内で深められていたものと共通であり，そのことと続く片山による『国家と革命』の読書体験後の理解の深化については，ここでは取り上げない。）

「世界革命に関するの日本」という「世界革命」を冠した片山論文が，『コミニスト』1921年1月5日号に掲載された。それは日本から送られてきた新聞類を主として，一部個人通信も加え，集められた情報（ただしその信憑性が疑わしいものもある）を，社会革命の機は熟しているとの楽観的な判断のもとに集約し，シベリア，中国，そして最後に詳しく日本の労働運動などについて紹介した時論だが，以下のように極東への視点がしかと据えられていた。「日本のシベリアにおける干渉は，幸いなことに中国人と朝鮮人に，自らの権利を主張し，そして彼らの真の友人であり隣人であるソヴェト・ロシアとの友好を求める最高の機会を与えた」，「多くの日本兵はボリシェヴィキの影響の下に至った。ボリシェヴィキの宣伝と文献は，日本中の兵舎においてまさに何度も発見されている。その上，外側から日本へ圧力をかけている重要な一要因がある，すなわち中国人の目覚めが」（S. K[atayama]., “Japan in Relation to the World Revolution,” *The Communist*, Vol.2, No.16, 5.I.1921, 6-7. ちなみに，1919年3月11日に片山が執筆した論文「日本と中国」では，「〔極〕東における社会主義革命の到来とともに，けっきょくアジアは平和と進歩の時代にはいるだろう。ロシア・中国および日本の人民は，新しい社会主義の世界でいっしょに平和に生活できるだろう」云々と，自らの実践との接点をもったとはまだ言い難い一般論的すぎる考えが提示されていた。S. Katayama, “Japan and China,” *The Class Struggle* (New York), Vol.3, No.2, V.1919, 165-172; 片山潜生誕百年記念会編『片山潜著作集』第2巻（河出書房新社，1960），356-364）。

1921年8月21日にニューヨークの同志たちへ宛てた書簡の中で片山は，同年4月20日付レーニンへの紹介状（上述）で田口を極東のプロパガンダにおいて使うように書いたことに触れ，それに関して「私の評論『来るべき世界革命における日本の立場』の全体の教義と思想は，その点についてであった。かの地の同志たちがその問題を重大に受け取り，彼らの注意を極東へ向けることは非常にうれしい」と記した（521/1/17/93-94）。

続く9月4日付本多（猪俣）宛書簡でも，片山は「同評論は同志T. [田口] のために書いた評論であった。のちに私は同志T. の利用のためにそれを練り上げすぎたと考えた。それでそれをバンクハーストへ送った」，同「論文が幸いにも極東〔書記〕局によって追求されている政策の同じ路線と通じていたと考える」と記した（495/18/66/97）。

ロンドンのシルヴィア・パンクハーストが主宰する『ワーカーズ・ドレッドノート』1921年8月13日号に載った同論文は未確認だが、アムステルダムの『ニーウエ・テイト』10月5日号にも載った。それに先だって、片山のリュトヘルス宛5月6日付書簡によれば、既にその時点でベルリン経由でモスクワへ向かいつつあるリュトヘルスへ「誰かによって[コミンテルン]第3回大会前に表れ、知られるようにするための特別な目的で書かれた」同論文が送られつつあった。同書簡には、「そこに日本人同志、田口運蔵もしくは猪俣津南雄が間に合って来るならば、どうかその論文を彼らのいずれかに与えてほしい」とも記されていた(495/108/11/24; 猪俣の名が出てくることについては、第3章第1節を参照)。また、片山はブレイ宛にも7月13日の「いくらか前」に同論文を送り、ブレイは7月22日付返信で、「極東会社を取り扱っているあなたの書簡、レポート&ストーリーを私は受け取り、そして本社へ転送した」と記した(495/18/66/35, 495/18/66/49-51)。

結局、同論文は題を「日本と来るべき社会革命」と変えられてコミンテルン機関誌に載ったのだが、その編集後記が10月8日となっており、それまでに届いたことになる。なぜ日付を細かく記すかという点、同論文は上記のように同年6-7月のコミンテルン第3回大会に向けて準備され、5月初めには書き上げられていたのだが、実際に大会に間に合ったかの問題があるからである。リュトヘルスへ宛てて早々と送った同論文はどうも困難に遭遇したようで、それが大会で取り上げられた形跡は見あらず、『ニーウエ・テイト』公表時にはあった副題が削られているところからみても、間に合ったようにはみえない(“De positie van Japan bij de komende sociale wereldrevolutie. Verslag van Sen Katayama aan het Derde Congres van de Commintern te Moscou,” *De Nieuwe Tijd* (Amsterdam) No.18-19, 5.X.1921, 587-598; . . . , “ . . . ”, No.18, n.d.[1921], 4711-4722; 『片山潜著作集』368-382)。

同論文の要点を取り上げると、「帝国主義にたいする闘争を遂行することは、すべての国のプロレタリアートの一つの共通課題である。われわれの宣伝が全世界に知られることは、また共産主義運動の無条件的な要請である。この共産主義運動の発展を促進するためには、なによりも、一つ一つの国の帝国主義の性格を、またその諸事情をプロレタリアートに教えなければならない」とみなして、以下、イギリスとアメリカの例が取り上げられ、そのあと日本が続く。日清・日露戦争そして第一次大戦を経て、「日本は現在の極東における、もっとも強大な力」となり、「日本の帝国主義は、極東における共産主義運動にとってもっとも重大なる脅威」となっている。そこで片山は「日本帝国主義にうちかつためには、日本のプロレタリアートにたいする世界革命の軍隊からの支持が無条件的に必要であるということをとくに強調し」、「共産主義インタナショナルは、日本プロレタリアートの革命の問題に、中国および朝鮮プロレタリアートの側からの援助を実際的に近よせなければならない。……日本帝国主義の打倒とともに、極東における社会革命は必然なものとなるであろう。極東が共産主義の権力下に属するやいなや、イギリス帝国主義はばらばらに崩壊し、イギリスの崩壊ののちにはアメリカ帝国主義もながくもちこたえることはできないであろう。／ロシア、ソヴェト共和国万歳！／共産主義インタナショナル万歳！／近づきつつある世界社会革命万歳！」と結んだ。

この間まさしく、「極東における社会革命」をめざして片山らの運動が展開されてきたのである。

かかる考えと実践を踏まえて，訪露した片山とその同志たちは，極東諸民族大会の準備過程で，「我々日本の同志たちが，どこまでまたどの程度に立ち入って，今日の日本における合法的活動のための政綱と宣言を定式化することが出来るかを，示すべきである。もちろん，その綱領は，日本共産党によって厳密に管理され，方向づけられ，運用されなければならない」と捉え，「日本のための綱領」作成を急務とした（“Program of the Far Eastern Conference,” 28.XII.1921 in: ， 495/127/12/108-119; 参照，加藤（1998），52-53; 加藤（1999），37-38）。

その草稿「日本のための共産主義的綱領および戦術」は，1922年1月3日に片山によって準備され，「日本共産党綱領」との題で露訳された（Russian version in: ， 495/127/29/1-11; The earlier version in English, “Communist Programme and Tactics for Japan,” prepared by Katayama in: ibid., 521/1/34/2-11; （ ） ， 271-275）。

それを考察する前に，そこにはこれまでの考えを実践に向けてさらに具体化した点と論調をいくぶん変えた点とが同居していたことに触れておく。前者については，1921年4月24日に日本共産党暫定中央執行委員会が本国で結成され，日本共産党の「宣言」と「規約」が作成されたのを知ったことを踏まえて「非合法共産党」を前面に打ち出すことが出来るようになったからであろう。後者については，コミンテルン第3回大会の基本方針の変更を知ったからと推測される。なぜならば，本文第1条「世界情勢の概観」の末尾で，「コミンテルン第3回大会は，合法的活動と，共産主義者の影響下で活動するであろう大衆的プロレタリア党の存在の必要性を強調した。また，共産主義的革命運動の発展のためにあらゆる可能性を利用する必要性も強調し」，「この新しい戦術は，各共産党にコミンテルンの精神で特別な綱領と戦術を作成する必要性を課している」と，その「精神」に沿う日本のための作成の必要性が記されているからである。

本文は前半（第1～3条）が世界および日本の情勢分析であり，後半は第4条「コミンテルンの緊急の課題」で8項目が掲げられている。いくつかの項目を取り上げると，第1項では「……我々は我々の共産党を強化し，その戦闘組織をつくらなければならない。……日本の同志たちはまた，大衆の中への公然たるプロパガンダにおいて労働者と農民を使うため，彼らの中に共産主義および労働組合の細胞の非合法組織を組織することを学ばねばならない。……我々には，大衆を組織し，道を教えることの出来る強力な組織された非合法共産党（これが現在のところ日本のために唯一可能な路線である）が必要である」，第6項「極東での国際組織」では「国際組織とその戦術はまた，自らの原則と適用において柔軟でなければならない。統一戦線が極東諸国において一国的および国際的要因を考慮に入れて確立されなければならない。日本に強力な帝国主義が存在するうちは，我々の共産主義プロパガンダは日本だけではなく，また朝鮮，中国においても強力な抵抗にあうだろう。それ故，共産主義運動とそのプロパガンダの緊急で主要な目的は，日本帝国主義への反対に向けられなければならない。この目的のために日本人，朝鮮人そして中国人は，共通目的のために戦術に関して合意し，共同して活動しなければならない」，そして第8項では「日本共産党の政治的綱領と戦術は，現在のところ穏健で議会中心的とならざるをえない。なぜならば労働者と農民は投票権をもっていないから。……日本におけるプロレタリアート独裁とソヴェト権力は，我々の党の最終目的でなければならない」とある。最後の第8項には，上記論調の変化に関わっていわゆるブルジョワ民主主義的思考があるが，それも「最終目的」をあくまで念頭においての記述になって

いることは注意されるべきであろう。

最終的には、極東諸民族大会の日本部会最終日に綱領的文書「日本における共産主義者の任務」が採択され、それは「日本代表団によって採択された政綱」という副題を付して大会文書集に掲載される（..., 147-152; 村田編訳, 495-499）。上記片山の手になる「日本共産党綱領」が発見されたことによって、和田春樹らによって関連文書「日本共産党綱領のための資料」（495/127/29/41-52）をも参照して、「政治制度の完全な民主化」の第一要求などを例に、両者には「明らかに親近性があり、この政綱の起草には片山の影響が大きいことが」明らかにされた（和田, 3-4; （ ），, 275）。けれども、それが採択された部会には 東方部部长サファロフに加えてプハーリンも出席したとのことだが（高瀬清『日本共産党創立史話』（青木書店, 1978）, 56-57）、部会での議論によってさらに修正がなされた可能性がなお残されているのではなかろうか。なぜならば、「任務」の方には「日本において」との限定故にか、「極東での国際組織」の役割および日本・朝鮮・中国の「共通目的」が取り上げられておらず、気になるところだが、明らかに後退しているのは、「最終目的」や「非合法共産党」の扱いである。かかる微妙なずれは、その後どのように展開していったかをみていく必要があるが、ここでまとめられるのは、極東諸民族大会への日本代表団の取り組み全般についてもだが、日本共産党のための綱領作成過程においてもまた、片山を中心とした在米同志たちの果たした役割は大きかったということである。

[付記] 本稿は2002～2003年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）による研究成果の一部である。

（やまのうち・あきと 九州大学大学院人文科学研究院教授）



ワタシの「困った!」を解決する本

女性弁護士が教えるトラブル解決術

中野麻美・村千鶴子・吉岡睦子 著

A5判並製/184頁/本体1,400円/ISBN4-8451-0662-0 C5036

女性のひとり暮らしは「困った」ことがいっぱい。自分の身は自分で守り、恋愛・しごと・お金…、すべてについて地に足をつけてがんばれ。

 旬報社